

二人の夏子——樋口一葉と伊東夏子——

河野龍也

実践女子大学文芸資料研究所連携協定締結記念特別展

樋口一葉の交遊録

実践女子大学文芸資料研究所連携協定締結記念特別展

特別展
二人の夏子
樋口一葉と伊東夏子

講演者 河野龍也氏
協賛 実践女子大学文芸資料研究所、河野龍也氏
主催 実践女子大学文芸資料研究所、河野龍也氏

開催期間 平成二十七年二月二十二日(土)～三月八日(日)

会場 台東区立一葉記念館 展示室3

◆観覧料 早稲田・早稲田西350円(入館料半額400円)

◆入館料 紙道楽部(紙道楽部) 500円(入館料半額400円)
紙道楽部(紙道楽部) 500円(入館料半額400円)
紙道楽部(紙道楽部) 500円(入館料半額400円)

◆入館料 (大人) 300円 (小学生) 100円 (中学生) 120円以上

◆主催 公益財団法人 河野文芸資料研究所、台東区立一葉記念館

〒110-0012 東京都台東区電話 2-10-4
TEL 03-5821-2881 FAX 03-5821-2882
http://www.garfish.org/03101210.jp

本稿は、平成二十七年二月二十二日、台東区立一葉記念館において、同館および実践女子大学文芸資料研究所の連携協定締結を記念して行われた特別講演「二人の夏子——樋口一葉と伊東夏子」の内容を、当日の録音に基づいて再現したものです。平成二十七年一月六日から三月八日までを会期として、同館では同じく連携協定締結記念特別展「樋口一葉の交遊録」が開催されました。

原稿化に際して全体を読みやすく整理しましたが、論旨に変更はありません。文中の記号「」はキーワードもしくは原文引用、《》は原文を簡略化した要約もしくは現代語訳、「一」はプリント資料の該当箇所を頁数で示したものです。

資料調査(写真撮影)・画像およびテープ起こしの提供など、台東区立一葉記念館には多大なご協力をいただきました。ここに謹んで感謝申し上げます。



講演開始／午後二時

ただいまご紹介頂きました河野龍也でございます。今回、この台東区立一葉記念館と、実践女子大学の文芸資料研究所とが、連携協定を結ぶことになりました。現在、記念館の三階には、平成五年、一葉の親友であった伊東夏子の嫁ぎ先にあたる田辺家から、実践女子大学に寄贈された資料が展示されています。連携の記念として、この特別展示と講演会を行うことになり、恐れ多いことですが、お声がけいただきましたことに心から感謝申し上げます。

私自身は実践女子大に就職しましてから日が浅いので、受贈時の調査に関わっておりません。今回のご縁で田辺家資料に触れる機会を得ました。資料は正確に解読の上、すでに実践女子大学から報告書になって出されております。基礎資料集という形ですから、今後の分析の土台となるものです。今回、記念館の皆様にもご協力いただき、記念館の資料と対比研究を行うことで、いくつかが分かってきました。今日はこの発見を軸にしなから、樋口一葉と伊東夏子、また彼女たちをめぐる歌塾「萩の舎」の人間模様について考えたいと思います。

プリントがお手許にございますか。ちよつと分量が多いのですが、これは私の職業病と申しますか小心者の証で、授業するときに教員として一番怖いのは、話の種が尽きてしまうことです。それでとにかくプリントを作り過ぎるのが癖になっていて、悪い癖ですがどうにもやめられません。丁寧に読み上げているといつも時間がなくなりますから、基本事項は要点のみかいつまんで申し上げたいと思います。

「萩の舎」と一葉の周辺

樋口一葉と伊東夏子が学んだ「萩の舎」の成り立ちですが、他にも、これは明治十年頃、中島歌子が開いた歌塾で、全盛期には門人千人以上を擁したと言われます。小石川水道町に安藤坂という坂があり、その横の階段を上がった十四番地というところ、二階建ての建物が萩の舎だったということ、写真も残っています。

この歌塾は皇室や華胄会と強い繋がりを持っていました。歌子自身は水戸の勤皇派藩士の未亡人で、同門の伊東祐命^{すけのぶ}を介して明治宮廷の消息に通じていました。また母方の縁で、歌塾には鍋島家の強力な後ろ盾があり、萩の舎門人には梨本宮妃、鍋島侯爵夫人、前田侯爵夫人は

じめ当時の貴顕が数多く名を連ねていたことでも知られていきます。

一葉・樋口なつの入門は、明治十九年八月二十日、数えて十五年の年です。この時、師の歌子は四十三歳。伊東夏子は明治五年生まれで、一葉と同じ十五歳です。ただ、夏子は十一の年に入門しましたので、塾の中では先輩です。もう一人、一葉と親しかった田中みの子は三十歳。宮大工の未亡人で、谷中に住んでおりました。一葉が黒門町から菊坂町に移るのは後のことですが、団子坂下の伊東夏子、そして谷中の田中みの子とは近場で親しく交流します。さらに重要なのは、貴族の令嬢が多い塾の中で、彼女たちが「平民三人組」の連帯感を持っていたことです。一葉の身分は厳密には士族の娘ですが、暮らし向きは他の二人より厳しいものでした。樋口家は代々山梨の農家で、父の則義が同心株を買って武士身分を手に入れます。が、その年大政奉還で幕府が崩壊。新政府の下で東京府庁、そして警察に職を得た則義は恵まれていた方ですが、その後金融事業で失敗し、家計は急速に傾いて行きました。一方、伊東夏子は日本橋に大店を張っていた、当時の名立たる鳥問屋の娘です。店は本小田原町と言って日本橋の魚河岸のすぐ裏側。母のお延はその女主人でしたが、娘の夏子と共に団子坂の隠居所の方に住んで、店には時々

顔を出すだけだったようです。田中みの子も、一葉が日記の中で大きな邸に驚いているほどで、生活にはまず苦勞のない人でした。「平民三人組」と申しましても内情はこのよう、一葉は後年夏子の家から多額の借財をします。

さて、一葉が生涯の友とした伊東夏子との交流についてですが、これは入門したての頃、人付き合いが苦手だった一葉を気遣って、夏子の母が自宅に招いたことがきっかけであったと後年の夏子は語っています。伊東家は母の延、娘の夏子ともども萩の舎の弟子で、師匠からお題をいただいで自宅で練習します。数詠みと申しまして、短時間に多数の歌を作って出来栄を競いますが、そこで一緒に精進したのが友情の原点だと言います。

この三人に加えて欠かせないのが田辺龍子です。一葉入門当時は十九歳。四歳上の才能ある先輩で、花圃の筆名を持ち、後に三宅雪嶺に嫁いで三宅姓となります。一葉が小説家になるきっかけを作りました。後年の回想で一葉のことを悪しざまに語っていることから、一葉ファンには印象のよくない人物ですが、実はなかなか面白い所のある人です。最初に、田辺龍子の人柄を示す興味深い資料をご紹介します。



伊東夏子と田辺龍子(花圃) —《展示資料紹介1》

実践女子大学が保管している伊東夏子資料の中に、龍子の書簡が三通あります。今三階の展示室の一番いい場所に、障子を立てて非常に雰囲気のある展示をしていただきました。これはしかし、実物を見ても龍子の書簡でみるとすぐには気づきません。封筒がなく、署名と宛名の部分、自分たちにしか分からない暗号のような絵文字になっています。

どうしてこれが田辺龍子からの書簡と分かるかと言いますと、これは伊東夏子、別の田辺さんの家に嫁いで田辺夏子となりますが、受け取った夏子本人

が後世に残すために、付箋を貼っておいてくれたからです。「画入り戯れの手紙／めづらしき品／後に参考品になる品」【資4②】などと丁寧な付箋がついたものであります。三通のうち、ここでは謎の絵文字を含む二通を取り上げたいと思います。

①の手紙【資3①】の最初の行に、「こ、はつぐはづですがめんどうゆへきつたなり」とあります。巻紙の継ぎ目が半端になっていますね。《本当はこういう中途半端な紙は取って新しい紙を糊付けしてきちんと長い見栄えのいい手紙にするはずだったのに、まあ面倒だからいいでしょ》と言っています。そして漫画みたいな絵に、「ネムイ／く／アー サビシイ／く／ケフハカアサマモミンナル スデサビシイ／く」のせりふ。それから宛名と差出人が絵文字で書いてあり、書き足りないと思ったのでしょうか、「いまごろはなににござるな なつ子さん手習してか哥をよんでか ア、ねぶいあくびくさみがでる斗 なつは哥よむこともいやにて／人形もはやもちあきてふづくへにむかふがしまで舟をこぐのみ」と書き加えています。後のところは五七五七七の戯歌です。机に向かいながら居眠りすることを、舟を漕ぐと言いますね。《人形遊びにも飽きて退屈。することがないから居眠りしています。その舟漕ぎがひどくて向こう河岸まで着くほどよ》。面白

い歌ですね。この書簡は年代が分かりません。それから
絵文字の謎もあります。わずかな手がかりとして、子供
に呼びかけるような言葉使用と、平仮名たくさんさんの文面
に注意して頂きたいと思います。

次に②の手紙【資4②】ですが、冒頭が「拝見いたし候
御心にかけさせられ病氣御たつね被下まことにくうれ
しさつたなき筆には申尽しかたく候」と読めまして、少
し大人向けのかしこまった文体になっています。内容は、
《病氣の徒然に三十六歌仙というのを描きました。その中
にはあなたも登場しますよ。そこにあなたの歌も添えた
いから、蝙蝠のことを何とか詠んだあの歌を教えてください
さい》というものです。これにも絵があつて、「ほんとに
ねへなつやん あなたよくく病氣たづねて下さつた事
嬉しくつてかしらのいたみもポンくのいたさもどどの
はれものこらずなくなりましたヨ なつちやんうれしい
く有がたうく」。ポンくはもちろんお腹のこと。本
文はかしこまっていますが、絵の添え書きはやはり子供
向けの言葉遣いで、病氣見舞いの手紙をもらった喜びを
手放しで表現しています。そして、ここにも絵文字が出
てきます。妙な花のような記号に、先ほどと同じ屋根型
の紋章。その次が「なつちやまへ」で、署名はひょうたん
のサイン。最後は「御かへし」とあつて、返事の文である

ことが示されています。

左団次びいきの「なつちやまへ」

さて、最初の疑問は①と②に共通して現れるこの絵文
字ですが、一見すると瓦屋根の棟の部分に見えます。②
では、「■のなつちやまへ」という、屋号のような使い方
をしていますので、最初に立てた仮説は、夏子の実家の
鳥間屋である「東国屋」の立派な屋根を記号化したもので
はないか、というものでした。

明治期の東国屋に関する資料は少ないようです。まず
商工名簿から当たっていきます。明治二十七年十二月出
版の『東京諸営業員録』【資6④】はまだ一葉が生きていた
時代のもですが、日本橋の肉屋の項目に、「鳥間屋東国
屋 伊東延」と、夏子のお母さんの名前が出ています。店
の所在地も「日本橋本小田原町七番地」と明記されていま
すが、期待した屋号や家紋までには知ることができません
でした。色々調べたあとで、時代考証では割とメジャー
な『明治百話』【資5③】に東国屋のことが少しだけ出てく
ることに気づきました。この本は昭和初期に出されたも
ので、編者の篠田鉦造は報知新聞の記者です。明治時代
をよく知る古老から思い出話を聞いて集めた庶民生活の

宝庫。これを読んでみると言葉自体が文化財級の貴重さ
 でして、チャキチャキの江戸弁から日本橋界隈の賑わい
 が活き活きと蘇ってきます。「地震後に『魚河岸キネマ』の
 オッ立つた土地が、モトを言ひやア知つゝゐる人もあらう
 が、『東国屋』といふ鳥間屋があつた。鎌倉以来の鳥屋な
 んで、姓を伊東、紋が丸にもつこうだ。裏がズーッと鶏
 舎で玉子なんか家の嬢アが「一つ貰ふよ」といつて、裏へ
 廻つて、五ツや六と持て来たつて、ビクともしねエ屋台
 骨だつたが、やはり時よ時節で潰つてしまつた」と、こん
 な調子です。それから魚河岸が関東大震災で潰れて、そ
 の後火の消えたような裏町になつた日本橋を惜しんでい
 るという。魚河岸相手の諸商人は鳶に油揚げをさらわれ
 たより途方に暮れ……なんて、威勢のよい江戸弁を聞い
 ていたくなりますが、ここで重要なのは東国屋の紋が分つ
 たということです。

「丸に木瓜」の紋をプリントに載せました【資6⑤】。し
 かし、せつかく分かつた東国屋の紋はどうも手紙の絵文
 字と似ていません。それで別の見方を考えますが、絵文
 字のこの屋根形をよく見ると、わざと菱形に特徴がつけ
 てあることに気づきます。つまり菱形の変形紋ではない
 か。菱形紋にも子持菱、三階菱、松皮菱などの色々な変
 形があります。これは半分に断ち割つてありますが、松

皮菱の上半分に似ています。そして屋根形の下の部分、
 三枚の葉が下に垂れた形を描いています。これはどう
 も鳶じゃないだろうか。こう考えてみますと、芝居好き
 の方はもう「高島屋」と掛け声をかけたくなる。「松皮菱
 に鬼鳶」と言えば、ご存じ左団次の紋ですから。

初代市川左団次と言えば、九代目市川団十郎、五代目
 尾上菊五郎と共に「団菊左」と並び称された明治きつての
 名優です。この人の紋で定紋は、団十郎の「三升」の中に
 左団次の「左」の字をはめ込んだ形になります。ただ、ふ
 だんは替紋を身に着けておりまして、これが「鳶」なんで
 す。プリントに男前の写真を載せましたが【資7⑥】、羽
 織の紋がやはり「鳶」です。「中陰」と申しまして中が黒抜
 きになっていますが「鳶」。「鳶」といえば芝居の世界では
 左団次のトレードマークです。

恐らく、少女時代の伊東夏子はかなりの芝居好き、そ
 れも左団次びいきだったのでないか。それで萩の舎の
 中では、冗談まじりに「左団次の夏子」と名乗ったり、親
 しい人からそんな風にかかわれたりして、若い娘どう
 し役者の噂で楽しんでいたのではないか。そのへんの感
 覚は、現代のアイドルや歌手の女性ファンの心理と変わ
 らない感じがします。

このことを裏付けてくれるのが夏子自身の回想で、こ

う書いています。「一部の門人の中に、自分でかえ名を附けるのが流行、九代目びいきは牡丹、左団次びいきは葵、紅葉の好きな人は、紅葉のと、手紙には、それを書きました」【資7⑦】。「葵」は「蔦」の誤りです。「紅葉」は木の紅葉（もみじ）でしょうが、作家の尾崎紅葉の可能性もあります。樋口夏子（一葉）については、『とかく寂しいことを書くのが好きな人で、自分にも「落葉」などという変え名で手紙を寄こしたので、そんなさびしい名前はよしてちょうだい』と伊東夏子が注文したのも面白いエピソードです。

龍子の手紙の宛名は、「いとうの左団次さま」と絵解きできるのではないか。これを補強する証拠は他にもあります。それは②の手紙の宛名、「松皮菱に鬼蔦」よりも大きく描かれた花の絵文字です。この丸い形はどうでしょう。朝顔の特徴を捉えているように見えませんか。芝居の世界で朝顔に関わりがある役どころと言いますと、有名な「朝顔仙平」という人がおります。これは「朝顔煎餅」という煎餅屋さんの広告を兼ねて作られたキャラクターで、歌舞伎十八番の『助六由縁江戸桜』に出てくる役どころです。

主人公は助六と揚巻ですから、朝顔仙平は端役で、しかもコミカルな役です。しかしこの役で左団次は大当た

りを取ったらしい。当時の錦絵や番付を見えますと、明治十七年四月に新富座で『助六由縁江戸桜』が上演され、市川左団次が朝顔仙平を演じました。上演時の錦絵が残っています【資8⑧】。一方、もう一枚の錦絵は明治十九年一月のもので、上演記録に符合しません【資9⑨】。よく見ると「布袋／市川左団次／君が代や下谷は布袋の雑煮腹」と書いてあり、開板が一月ですから、これは歌舞伎役者を七福神に見立てた正月の縁起物だということが分かります。人気役者が勢ぞろいする組み物の錦絵で、市川左団次は朝顔仙平の役どころが描かれている。つまり定番になっていく。左団次と聞けば、当時の芝居通はすぐにあの派手な朝顔模様の着付けと、煎餅づくしの劇軽なセリフを思い浮かべたというわけでしょう。

このように考えますと、②の手紙の朝顔模様は、やはり芝居の線が濃厚です。「朝顔のなつちやまへ」。それは「左団次扮する朝顔の仙平」をふまえた二人の暗号だったのではないでしょう。四歳離れた少女どうし、姉妹のように親しげな様子が伝わってきます。龍子には、アイドル好きの後輩をそのアイドルの名で呼んで冷やかしたり、喜ばせたりするような、実にお茶目な初々しさがあったのです。

龍子画『三十六家撰』の伊東夏子

龍子書簡のもう一つの謎は、署名の絵文字です。ここには瓢箪の形が描いてあります。瓢箪は「ひさご」と言いますね。この「ひさご」こそ、実は田辺龍子が愛用したペンネームの一つでした。龍子は『女学世界』などの雑誌に寄稿する際、「花圃」と並んで「ひさご」の署名も使っています。大体明治二十三、四年頃の文章が中心で、それだけを見ますと、先ほどの左団次の錦絵とは少し時代が離れます。ただ、この「ひさご」の号は、もっと早い時期に使い始めていたはずで、「ひさご」は仮名で書くよりも、絵で描いたサインの方が断然見栄えがする。もとは絵に添えたサインだったのではないかということです。

田辺龍子のお父さんは外交官です。古い言い方ですが、花嫁修行のため、上流階級のお嬢様として、龍子は様々な教養を身につけさせられました。その習い事のの一つが絵で、絵師の河鍋曉齋かわなべきょうさいに入門していたことが分かっています。

なぜ分かっているかと申しますと、この曉齋という人は描くことの魅力に憑りつかれたような人で、日常の出来事を皆絵日記に描いて残しました。言葉の説明はごくわずかで、何の出来事を描いた絵か分からないものもある。

る。ただ面白いことに、明治十八年二月二十三日の項を見ますと、「田辺辰子」という名の若い娘が絵の稽古に励む様子が見えます【資11⑩】。もう少しさかのぼって、一月二十九日には、同じ若い娘が紙を前に画題を思案している絵があり、そばに「老円」の絵と「入門」の説明が添えてある。これは田辺龍子の入門の日を描いた絵日記と言われているものです。

注目すべきは、②の書簡の文中に、「三十六歌仙」という言葉が出てくることです。これは萩の舎の歌人達を三十六歌仙に譬え、絵と歌を百人一首の絵札のように組み合わせて綴った手作りの冊子です。戦後に作られたその複製が一葉記念館に所蔵されていて、今回の企画で三階に展示されています。複製とはいえ限定百部の大変な珍品で、私も今回の展示で初めて拝見しました。原本成立の年代は不明ですが、明治十八年頃と推測されるようです。確かに、曉齋の絵日記に龍子が出てくるのは、ほぼ明治十八年の一年間に限られています。

すでに申しました通り、②の書簡の内容は、「かはほりにうちまじりても、とかなんとか申御哥」を教えてほしいという趣旨でした。『三十六家撰』に収録されている伊東夏子の絵【資10⑩】を見ますと確かに、「かはほりにうちまじりつ、夕されはむかひの小田にとふ蜚哉」という歌が

書かれています。「かわほり」は蝙蝠のこと。②の書簡は、まさに『三十六家撰』が成立する舞台裏を伝えていたわけです。

中島歌子の門下生達を絵にしたい、そして手紙にまで絵を描きたくてたまらない、それほど絵の手習いに熱中したのは、やはり暁斎の許に通った明治十八年前後と見るのが自然のように思います。①や②の書簡が、明治十八年前後に書かれたものとすれば、左団次の「朝顔仙平」が人気を博した時期ともちょうど重なります。また、手紙の文面が子供に呼びかけるような言葉遣いになっているのにも納得がいきます。明治十八年、伊東夏子はようやく満十三歳を迎えようとする少女でした。

絵文字を「左団次」と読み解くことで、色々なことに辻褃が合ってきます。書簡と『三十六家撰』の年代推定の新たな根拠となるものではないでしょうか。

回想録の中の一葉——花園VS夏子

ここからは少し話題を変えて、樋口一葉の人物像に迫ってみたいと思います。一葉は自己を日記の中で語っておりますし、彼女の才能は作品を見れば明らかです。ただ、一葉が生身の人間として萩の舎の中でどう振る舞ったの

か。これは『一葉日記』だけでは分からない部分があります。ある一人の人物像は、本人の自己イメージだけでなく、他者による評価を含めて複合的に理解していく必要があるでしょう。萩の舎の人物関係の中で、一葉について証言しているのは、田辺龍子と伊東夏子の二人です。これを読み比べると実に意外なほどで、二人が一葉という人物をいかに違った角度から見ているかが分かります。様々な点に関する評価が正反対なのです。

二人の回想には時期的に開きがありまして、龍子（三宅花園、旧姓田辺）の回想は明治四十一年に始まり、昭和初期にかけて何度か一葉について語っています。一方、夏子（田辺夏子、旧姓伊東）の方は、その間じっとこれを聞いていて、昭和十六年に初めて一葉への思いを明かします。それが龍子の回想で知られていた一葉とは全然違うものだったので、関係者には衝撃的だったらしい。樋口一葉とは一体どんな人だったのか。かえってその謎が深まってしまった感じがです。

龍子と夏子の回想をすべて揃えて眺めますと、不思議なことに細かい所まで話題の選び方が共通していて、しかも内容が反対になっています。例えば、龍子によれば、一葉は「ふくみ声の鼻にかゝりてほんとにくとくりかへして物をいふ癖」があったり「身をすりよせて」物を言った

りする。島崎藤村や斎藤緑雨の人物評をするなど噂が好きで、「如才ない物ごしのやさしい」部分と、「少し偏屈にて、何か言葉のはしにむすぼれたるやうな意のこもれる」部分とがあつたと言っています【資12ア】。はきはき、さばさばした感じではなくて、しなだれかかってくるような感じの話し好きであつたり、如才なく人間関係を取回したりする、抜け目ないおかみさん風の人物として龍子は後輩を見ていたわけです。

一方、同じ年の夏子に言わせると、「人の膝に手をおいて、ネー／＼と言ふたり、人にひつつく様にして、自分から親しみをもとめてゆくなどと云ふ事は絶対にありませんでした」。近眼で人の顔も見えないくらいなのに、そんな馴れ馴れしい格好をするだろうかと言っています【資12ア】。

龍子にとって、一葉はどうも生意気に見えたようですね。明治十九年十一月九日、一葉が入門した日です。「私達は五目寿司の御馳走になつた。／＼その寿司を運んだのはついぞ見かけた事のないほつそりとした、小綺麗な十五歳位の髪の毛のうすい娘であつた。す、められた五目寿司の盛られた小皿を、ふと見るともなく見るとこんな文句が書きつけてあつた。／＼「清風徐吹来」何の気なく江崎さんと私とがこの文句をよみあげると、前に坐つて

ゐたその娘はさかしさうに瞳を輝かしながら、何となく気まり悪さうに小さな声で、／＼「水波不起」と突嗟間に言葉が続けたというのです。宋の蘇軾が書いた名文「赤壁賦」を一葉が暗誦したのに驚いて、「この小娘は何といふ小生意気なことであらう」と思つたと言います。入門初日から先輩に目を付けられたわけです。「この娘が樋口一葉、その頃の私達の呼び名をもつてするならば「なつちゃん」なのである」【資13イ】。萩の舎の初代「なつちゃん」は伊東夏子で、今度また樋口夏子（一葉）という新しい「なつちゃん」が入つてきたので、区別するのに伊東夏子は「いなつちゃん」、樋口夏子は「ひなつちゃん」と呼ばれました。歌会の記録を見ても、「夏子」の上にカタカナの「ヒ」と「イ」あるいは漢字の「樋」と「伊」が書かれています。

龍子是小癩な小娘と思つたわけですが、親友の夏子は次のように証言しています。一葉は確かに、「みの子さんや私の、平民組と一緒に、会の際は茶菓をはこぶ手伝ひはしました」と。けれども「毎月の例会におすしの出た事は一度もありませんでした」（会場内に笑い）。龍子の証言を完全に意識した反撃です。私たちは平民三人組で一緒に働いていたからよく分るんだと言いたげなんです。ね。「生意気とか傲慢とか、物知りぶるとか言ふ感じは、始めから全く無い人でした」【資14イ】。一体どちらが本当な

のでしようか。

さらに龍子は、一葉がひがみ屋で、親切な師匠すら恨んでいと述べています。「彼女が残した日記に依つても知ることが出来るが、彼女は中島先生が親切を尽してくださらなかったことをかこつてゐる。…けれども中島先生はなつちやんに対して実に親切であつた。貧しいなつちやんには思ふやうに着物なども買へない。中島先生はよく自分の着物を仕立てなほしてなつちやんに着せてゐらつした」【資14ウ】。一葉は恩知らずだと言うのですが、（伊東）夏子の方はこう言っています。「夏子さん（一葉）が、特別に師匠の悪口や不満をもらした事はありませんでした。日記には出てゐるかも知れませんが、もと／＼日記は、焼きすててくれと言ふてゐた位で、絶対に人の目にふれぬつもりで、作りかざりの無い、自分の思ひを、述べてゐるのだと思ひます。詞に慎みのある人には、日記は、自分の思ひの発散場所だつたのです」【資14ウ】。こんな感じで、一葉を庇っているんですね。たとえ日記に書いたとしても、当時面と向かつて師匠の不満を言つたことなど、自分たちの間ではなかつたというのが夏子の言ひ分です。

さらに続きます。ここまでくるとバトルなんですけども（会場内に笑い）、龍子からです。「ある時、多分明治

二十五年頃であつたと思ふがなつちやんが私の家へやつて来た。／＼一時間位、しなを作つては散々しねくねしねくねとした揚句、帰る時に言ひ出したのは、「あの、私、貴女様の御真似を致したのでございますけれど、あの、私のやうな者がそんなおまねをしたいなど、申し上げるのは恥しうございますわ…。」とか何とかいつてその日はそれで帰つて行つた。／＼私の真似といふのは原稿稼ぎをするといふことであつた。当時私は、つまらない物を書いては雑誌などにのせたり、また最近には、金港堂から出版したりしてゐた。貧しいなつちやんにしてみれば、こうしたなりはひは濡れ手で粟を掴むやうなぼろい金もうけの方法と思へたのかもしれない」【資15エ】。「ぼろい金もうけ」というあたりが何とも刺々しくて、やはり悪意を感じますよね。昭和六年にもなつて、明治二〇年代のことをこういふ風に証言しているんです。これだけを読むと、田辺龍子ってどういふ方なのかと思つてしまいません。

当然夏子も黙っていません。「小説を初めたのは、金が欲しいに違ひありませんでしたが、母、妹さんを、養ひたいために」…存じのように三人の女所帯を支えたのが一葉です。それが目的なのだから、「自分が欲ばると云ふ点からではありませんでした。それを『金に刺戟されたの

です本当をいへば』などと、言はれると、拜金者のやうにきこえると思ひます」と、龍子の証言に勝負を挑んでいます【資15エ】。

この他にも色々続きます。師匠がやっと工面したお金なのに、一葉は当たり前のような顔で受け取って、恩を知らないと言え、いつも頭をぺこぺこ下げて師匠に感謝ばかりしていたと夏子は言いますし【資17キ】、島崎藤村、馬場孤蝶、平田秃木などという『文学界』の若手と派手な交流があつて、土間に書生の下駄がいつぱいあつたと龍子が言え、そんなことはあり得ないと夏子は反論しています【資18ク】。

一体どちらの一葉が本当なんでしょうかと、読む方は戸惑うばかりです。一葉を応援する者は、龍子を悪役にした。けれども、龍子の気持ちになるとどうでしょう。一葉が小説を書くきっかけになつた龍子の『藪の鶯』、この小説を知っている人は、現代一般にはなかなかいません。一葉の方は、擬古文が読みづらいつつても文庫本になつてゐる。名前を聞けばすぐ分かる。五千円札になつてます。財布に入つてゐる（会場内に笑い）。知名度には随分違いがあります。これはむろん明治の頃から、そういう違いがあるわけです。

龍子は自分こそ一葉を小説家にするため努力した、そ

れなのに一葉は感謝もしないと繰り返したいようですが、そんな気持ちにもなつたかも知れない。一葉は四歳年下の後輩なのに、自分を追い抜いて有名になつてしまつた。龍子は負けず嫌いのお嬢様育ちです。そのへんを考えますと、龍子が何十年経つてもムキになつて一葉の悪口を言つてしまふところに、ある種の人間らしい業の深さを見てしまいます。龍子の中で、一葉はまだ死んでいなかったのかも知れません。そういう生々しさを感じます。

何が事実か

ただ、そんな一般論に持つていく前に、本当はどうだつたのか、分かるならやはり知つておきたい。皆さん伊東夏子が語つたような一葉であつてほしいと願うわけですが、夏子の証言にも、疑わしい部分がないわけではありませぬ。状況的に気になるのはやはり、彼女の話が全部、龍子への意図的な反論になつてゐることです。龍子には一葉を貶めたい気持ちがあつて、それは彼女の才能を認めていた証でもあるわけですが、感情を抑えきれずに棘のある言い方をする。それを一つ一つ取り上げて、正反對のことを述べるのが夏子です。これは、夏子の文章だ

けを読んでも気づかず、比較することではつきりと分か
ります。龍子は夏子を意識せずに語っている。けれども、
夏子には龍子への明らかな対抗意識がある。そういう違
いがあります。

証言の信憑性を測るために、ここでは半井桃水との噂
に関する部分を例にします。一葉は龍子の刺激で小説を
書こうと思い立ち、朝日新聞の記者で小説家の半井桃水
に入門します。桃水は当時三十そこそこの男ざかりで、
妻を亡くして独身。洒落っ気があり親切で、色白の美男
子でした。当然、萩の舎では色々に取沙汰されて、一葉
は非常に辛い思いをします。

龍子はこのスキヤンダルについて、責任は一葉にある
と言っています。「男との交際は沢山ありましたが、まあ
皮肉評をする方が多くて、恋（ラブ）に落ちた事は遂に無
かつた様です。半井桃水さんとはよく往来がありました。
そして半井桃水とよく噂が口の上りました。私此間の晩
に行つたら半井さんが臥てゐたとか何うとかで、私蒲団
をもう一枚懸けてやつたとか何うとか、そんな事をずん
／＼話すのです。「貴女そんな事を減多に話すものぢやあ
りません。人に何とか言はれますよ」と申した事でしたが
誰にでも半井さんの噂をずん／＼するものですから果し
て評判に上りました」【資16才】。

それに対して夏子の方では、「桃水に、小説を見てもら
ひ初めました時、独身で好男子だから都合がよくないと、
言ひましたので、何か思はせぶりの事を言ふかと問ひま
したらそんな事は一度も無いが、此間嫁の申込を、断り
ましたよと、話したが、そんなよけいの事、わたしに言
はずともいいにと、思ふただけと、只それだけで、みの
子さんにも私にも、桃水ののろけじみた事は一度ももら
したことはありませんでした。たとへ好きな人があつたと
しても、人の前で手ばなしで、のろけるやうな、そんな
人ではありませんでした」という反論になる【資16才】。

ここでご注意いただきたいのは、この龍子の証言が明
治四十一年になされたことです。一葉の日記には、確か
に桃水が寝ている所へ一葉が一人訪ねて行く記述が何度
か出てきます。しかし、それが読めるようになったのは、
明治四十五年、博文館から出た『一葉全集』が最初なん
です。半井家で一葉が何をしていたか、これは一葉から直
接聞いたのでない限り、明治四十一年の龍子が知り得る
ことではありません。それを現に語っているのですから、
一葉は嬉しくて、ついのもろけてしまったと考えないと辻
褌が合わない。もちろん、活字になる前に一葉の日記を
見た可能性はあります。が、この時期はまだ日記を読ん
でいないと龍子は断っています。

一葉と龍子の交流を客観的に知る資料としては、書簡が残っています。明治二十五年七月二日に龍子から一葉に送られた手紙をご紹介します。「一昨日ミの子様御來訪かねて御咄しの事承り申候。いろ／＼御事情も承りおよび、御きの毒に存じ候。やす／＼御うけ合は申候もの、随分御承知の通り青蠅なす蚊学者の候世の有様、思ひ通りに行けバよいがと氣遣はしく候」【資20①】。一葉が田中みの子を通じて龍子に、小説の持ち込み先の世話を頼んでいたことが分かります。それまでは半井桃水の『武蔵野』という雑誌に作品を載せてもらっていましたが、二人の仲が噂されてもう桃水には頼めない。生活のために小説を書き続けるなら、あとは先輩の龍子に頼むしかない。一葉の方から頼んでいるわけです。

龍子の文面には、実に後輩思いの人の良さがあふれています。《夏の読み物はよく売れるから、それに間に合うよう原稿ができませんか。細かいものを沢山書くよりは一つ大きな作品を書いて人をあつと言わせるように》と丁寧なアドバイス。そして、「理屈ばつた事申やうなれど、人はまご、ろが肝心にて、わらつて咄す時斗が友にハ候はず。泣てかたる時の友こそ誠の友と存じ候。私くしかなり身に不相応な辛いも酸もなめしゆゑか、君の事承りても浅からぬ御同情を持居候。何とぞ御心の中打明られ、

元來浅学無識何の御役にもた、ねど、泣てかたる友否姉妹ともおぼしめされ被下度し。…何とぞ／＼この上の願は、万事御勉強ありて、後世にも残るべきもの御著しあり、当代の紫式部とも清少納言ともてはやされ給はん事に御坐候。…わたくしは一番君におもきをおき居候に御坐候。何とぞ／＼たゞなぐさみななど、いふ私くしのやうなのハ極々／＼あしき事故、一生懸命に御成遊して、御心を高潔に、おもひをこらし給ひて、よの中の女といふもの、名譽をも御起し被下度し」【資20①】ここまで言つて一葉を励ましているんです。

これは自分が先輩で、小説家としても先に成功していましたから、その余裕があつてのことだとは思いますが、でも、これだけ後輩思いに親身になつて骨を折つていきます。そして龍子のお蔭で一葉は原稿を売ることができました。回想だけ読むと、龍子は何と恩着せがましい人かと早合点しそうになりますが、一葉は実際、龍子には世話になつているわけです。

一葉から龍子に送つた八月四日の手紙があります。《早く小説を完成させてお見せしたいと思つたけれども、うまくいかず遅れて申し訳ありません。紹介して下さつたのに私がなかなか書かないから、あなたは怒つていませんか、それがとにかく心配です》という詫びから入つて、

「先日参上の節も不足のなきおしやべりを申ながら、まだく御話しせねばならぬ事情も種々あり、と角御見捨なき様とのミ祈り居候」と書いてみたり、「もしく友のたはしとも思し置れ候ハッ」と書いてみたり。最後には歌も付いてまして、「よもぎふにさし入る月のかげミればよは捨がたきものにぞ有ける」——草ぼうぼうのあばら家に住んでいても、そこに清らかな月が射してくる。この月の光を見てみると、世の中捨てたもんじゃないと思う。そういう歌なんです。この歌を龍子に送る意味は明白です。《あなたにおすがりして、私はどれだけ助かっているか分らない。貧乏な中にもあなただけが頼りだ》と、龍子の温情を貧乏な家に差し込む月の光に譬えています【資21②】。

「不足のなきおしやべりを申しながら」とあるからには、一葉はやはり、龍子の前では結構なお喋りだったのではないか。手紙の文も非常にそつなく書かれていますよ。私のことを友達だと言ってくださるのに甘えて見逃してほしいとか、もっと喋りたいことがあるけれども筆には尽くせないとか、こんな歌も作ってみましたと言って相手を持ち上げるとか、意外にも世故に長けたような一葉の一面が垣間見えています。伊東夏子が語る、奥ゆかしくて御殿女中のような一葉の姿とはちょっと違うように

思うのですが、いかがでしょうか。

余談になりますが、龍子が一葉を下町のおかみさん風に見ていたのと、夏子が一葉を堅い礼儀正しい人と見えたことの違いは、樋口一葉という人間像の背景を考へる場合には中々暗示的です。一葉の家は、士族ではあるけれども、家系的には農家です。父が武士になったと言っても幕府はすぐ倒れてしまっただけですし、彼女の生活はとても豊かなものではありませんでした。ですから非常に庶民的な面を持つ一方、和歌の高い教養を身に付けていて、歌の仲間では一番の才能を示します。凛とした士族の娘という雰囲気も確かにあつたでしょう。どちらに片付けようとしても、一葉という人は片付かない人です。こういう二つの面をそれぞれ極端な形で見ようとする、田辺龍子と伊東夏子のような評価の落差が出てくるのかも知れません。

龍子と一葉の確執

さて、こんな風に、一葉を親身に手助けしていた龍子が、後年にはなぜ回想に一葉への悪意を滲ませる結果になったのでしょうか。その原因を探ると、明治二十七年五月七日の一件にたどりつきます。龍子が歌塾を開くお披露

目会を催した日です。それより早く、明治二十七年二月二十七日の『一葉日記』には、龍子独立の噂を聞いて、一葉が狼狽し、やや取り乱すような場面が出てきます【資2③】。

この頃の日記のタイトルは「ちりの中」。これは萩の舎の華麗な世界から離れ、吉原遊廓裏手の龍泉寺町に住んで、駄菓子屋を兼ねた荒物屋をやっていた時期に当たります。自分がそのような時に、きらびやかな令嬢達を集めて、中島先生の後継者であるかのように振舞おうとしている龍子の様子を耳にした一葉は、いてもたってもいられなくなつて田中みの子を訪ねます。そして、偶然来合わせた伊東延と三人、萩の舎の現状を嘆き始めます。「談は中島の師が上なり。品行日々にみだれて吝いよ／＼甚敷、歌道に尽すこゝろは塵ほども見えざるに、弟子のふえなんことをこれ求めて、我れ身しりぞきてより新来の弟子二十人にあまりぬ」。《師匠もけちになつて、金の為に弟子を増やし、塾の質を落としている》と。「かゝるが中にこの有様を知りつくしたる龍子ぬしが、これに身を投じて家門を開かんとす」。この隙につけこんで、龍子さんが成り上がろうとしているんだという話も出てきた。「おぼろげのかんがへにハあらざるべし」。《たまたま時期が重なつたのではなく、龍子さんは機会を狙っていたん

だろう》と疑っているわけです。

それで一葉はどうしたかというところ、田中みの子を激励し始めるんですね。《私は今実業の方面に就いているから、すぐに歌で身を興すことはできない。けれども田中さん、あなたは歌をずっと続けていたでしょう、龍子なんかに負けては駄目》と言う。みの子も満更ではなく喜んでいますが、その後で一葉は日記にこう書いておられます。「此人もとより汚濁の外にたちてすみ渡りたるこゝろならぬハしれど、おもて清くしてうらにけがれをかくす龍子などのにく、いやしきに、よしけがれはけがれとして、多数のすてたる此人にせめてハ歌道にす、む方だけをはげまさんとて也」。真偽のほどは不明ですが、この時期田中みの子にも男性関係の疑惑がかかつて、孤立無援の状態でした。一葉もみの子を信用せず、この人も濁っていると書いています。けれども、汚れた心を隠して表向きは清らかに見せかける龍子よりはましだと言う。一葉の言葉は相当辛辣です。

後でこれを龍子が読んだ時のショックは、想像してみると気の毒で仕方がありません。まさにそのショックが、日記公開後の回想には出てくるんですね。龍子の嫌味は、一葉の日記に比べれば、まだ穏やかな方だと言えるかも知れません。

さて、問題のお披露目に戻りますが、明治二十七年五月七日当日の日記が欠けていて、詳しいことは分かっていません。ただ、どうやらこの日、一葉は龍子のお披露目を欠席したようです。それは龍子から一葉に宛てた手紙が残っているので分かります【資23④】。「土曜には候へども、もしやと待わたり候ひしに、御出席なき事、一人も多くと願候に、まして御前様の御姿のなきは、いかに人々も本意なくおもひし事と存候。御哥有がたく候。いづれハ御まのあたりに。かしこ」。土曜日は秋の舎の歌会で、一葉はこの時期師匠の代講も務めています。けれどもあれだけ可愛がった一葉なら来てくれると期待していたでしょう。その当てが外れたのを龍子がなじる手紙です。《歌はありがたく受け取りました》と書いてありますから、一葉は義理として、歌だけ贈ったのでしょう。

その後の回想を見ると、龍子のこの時のわだかまりは後々まで消えなかつたことが分かります。「あんなに親しくしてゐたなつちやんと私も遂になつちやんの偏狭な猜疑心から別れてしまつた。／：「弟子をとるからには名ひろめの会をしなければなりません」と中島先生にははれたので、私は可なり盛大な名披露の歌会を催した。／これを知つて怒つたのはなつちやんであつた。／「内弟子である自分をさし置いて、先生は花圃さんを後継者にす

る気らしい」／それ以来、なつちやんは私に昔日の打ちとけた気持ちどころか、却つて敵が心をもつやうになつてしまつた【資16カ】。確かに、一世一代の晴れ舞台に顔を出さないのでは、一葉に含む所があると龍子が思うのも無理はないでしょう。しかも、二月二十七日の『一葉日記』にある通り、それは決して龍子の思い過ごしではなかつたのです。

しかし、伊東夏子は一葉がこの会に出席していたと証言しています。「花圃女史の初の会の時出席して来ぬので、迎ひをやつたと云ふのは、何かの間違ひで、私と一緒に、早く出席して、快く手伝ひました【資17カ】。一葉が慌てて駆け付けた可能性や、最初から手伝つていたのに龍子が気づかなかつた可能性がないわけではありません。しかし、来るはずの一葉を龍子が待ちかねていたことは、手紙がある以上事実です。裏切られたという思いが龍子の中に残り続けることから、実際待ち人來たらずだつたのではないか。もちろん日記の記述がないので確実なことは言えませんが、夏子の弁護にはさすがに無理があるように思います。

一葉と夏子

伊東夏子の回想は、田辺龍子への対抗心から正確さを欠く部分があるのは事実です。ほんの断片のみ現存が報告されている夏子の日記には、一葉の死後、斎藤緑雨と交わした対話が記録されています。「樋口さんをかひかぶつてもらつてか、れた方が、一寸みたところハ嬉しうございます」と夏子は言っています【資34⑩】。もしかすると、夏子は回想でわざと一葉を買いかぶっているのかも知れません。が、それでも、龍子のものよりは読んでいて確実にほのほのと気分がいい。友人の姿を美しく後世に伝えたいという情熱が、明治三十年のこの日記の頃から、昭和の戦時中にかかる晩年まで全くゆるがないとしたら、その姿勢は感動的です。また、回想自体にも、反論に力が入る箇所を除けば、説得力のある部分も数多くあります。「いなっちゃん」「ひなっちゃん」の呼び分けもそうですし、一葉がひどい近眼だったことも面白く紹介されています。かるたを取る時、一葉が目を近づけて札を見るから、頭が邪魔になって仕方がない。《眼鏡かけてよ》と夏子が言うと、《人前で眼鏡だけはかけたくない》と一葉は嫌がったとか。同い年で遠慮のない付き合い方が、こんなわずかなエピソードからも実によく分かります【資

24】。

ちなみに、このかるたのエピソードはかなり信憑性が高いと思っています。実は一葉自身が田中みの子宛てに書いたこんな手紙が残っているからです【資24（参考）】。「御書拝読、昨日はわざわざ御入来難有、乍例の失礼御海恕ねがひ上候。さては歌がるた御催しのよし、拝見しても願度候へど、例の近眼、とても一人前の通用は六つか敷、ざりとて、半人部類へ御編入にては、など、ぜいたくを申のにはこれ無候へども、「枕の草子」の「物は」の中に、「勞して功なきもの、近目のかるた取らんとする」とか有る様に御坐候ひし」（会場内に笑い）こんなの本当は無いですよね。それで、《失礼があつたら苦情は私でなく眼に言つてちょうだい》とうそぶいている。十歳離れたお姉さん格の先輩に甘えてこう書いているわけです。ユーモアがあり、茶目っ気たっぷりな一面も一葉は持っていたことになります。

さて、一葉の日記中、伊東夏子との関係で一番クライマックスになる場面は、桃水と縁を切れと言って、夏子が一葉に迫る場面です【資25⑤】。それは明治二十六年六月三日に中島歌子のお母さんが亡くなったあとの、慌ただしい最中のことです。歌子の家にずっと泊り込みで手伝いをした一葉は、六日に野辺送りを済ませた後、一度

家に帰ります。実家から《半井さんの手紙が来ているよ》と知らせがあったので、《じゃあ帰らなきゃ》と帰るわけです。翌日の七日、昼過ぎに家を出て桃水を訪ねます。このとき、島田鬻に結って、非常に美しく若々しい姿で桃水のもとを訪ねているんです。何日間も病人を看取って、ずっと泊り込みだったから、ここで湯を使って髪を結い直したのでしょうか。張り切っておめかしするわけです。

半井家の人達が《珍しいわね、綺麗だね》と言ってくれるのが一葉にはよほど嬉しかった様子です。そして桃水からは、さらに嬉しいことを言われます。《君の文章は素晴らしいから、文壇の重鎮の尾崎紅葉に推薦してあげよう。彼に推薦したら読売新聞に書かせてもらええるかもしれない》と。新聞は毎日発行されて部数も多いから、原稿料が雑誌と比べ物にならないほど良い。文才を活かして生活費の足しにするという、一葉の念願があと一歩で叶いそうだという所まで来たわけです。

この後、「夢の様にて十二日にも成ぬ」と一葉は日記に書きます。《野辺送りの後にも色々儀式があったので、慌ただしく過ぎすうちに十二日になってしまった》ということでしょいか。師匠の家の忌中に不謹慎かも知れませんが、《桃水から嬉しいことを言われて、浮かれているうち

に日が経ってしまった》という意味にも読める。しかし、この十二日以後、一葉は幸福の絶頂から一転、奈落の底に突き落とされるような思いを味わうことになります。

十日祭で忙しいさなか、物陰に呼ばれた一葉は、伊東夏子から急に「君は世の義理や重き、家の名や惜しき、いづれぞ」と問い詰められます。一葉の答えは、「家の名」。《義理は自分個人の問題で済むが、家の名譽は母や妹にも関わるから》というのがその理由です。夏子は、《それなら桃水との交際を断て》と忠告しています。一葉はびくつきりしてしまつて、「いつぞやも我いひつる様に、かの人年若く面で清らになどあれば、我が参り行ふこと、世のはかり無きにしも非ず。…されど、神かけて我心に濁りなく、我が行にけがれなきは、知り給ハぬ君にも非らじ。さるを、などこと更にかうはの給ふぞ」。分かりやすく言つてしまえば、《あの人が格好いいからって、私そんな下心無いもん》。「年若く面で清らに」ですから。一葉自分が惚気ているのに気づいていないなと思うのは、こういうところなんです。(会場内に笑)

夏子から真意を聞く機会もなく十四日を迎えて、一葉はひと思いに師匠に相談します。すると師匠の方も驚いて、《あなた半井さんと結婚の約束をしたんじゃないの。そういう深い仲だと随分噂されているじゃないの》と。一

葉はショックを受けまして、「我七年のとし月傍近くありて、愚直の心と堅固の性は知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給ふが恨めしく、人目なくは声立てても泣かまほし」と、文章にも感情の高ぶりが見えます。半井桃水はどうやら、友達の間で一葉のことを妻だと言いつらうしていたらしい。萩の舎では知らぬ者がなくらい噂の種になっていたいて、一葉だけがそれを知らなかった。

この時の師匠が偉いなと思うのはここです。「扱は其半井といふ人とそもじ、いまだ行末の約束など契りたるにてハ無きや」。実はこれ疑っているわけではないんですね。続きを読めば分かりますが、《本当に深い契を交わしたのなら、これも運命だから他人に遠慮することは無い。悪く噂されても、この人と結婚したいとあなたが思う信念に従つて、突き進みなさい。でも、そういう事実はなく、相手が勝手に噂しているだけなら、そんな男は信用できないから別れてしまいなさい》。こんな風に言つて一葉の意思を尊重しようとするわけです。だけど、気が動揺している一葉は、肝心なところを誤解して、《師匠にまで疑われた》と短絡的に思い込んでしまっています。

田中みの子や田辺龍子に対する一葉の不信感も、この桃水の問題から出ているように思われます。友達だと思つていたのに、彼女たちも隠れて噂をしていた。《夏子さん

は才能がある方なのに、あんな下らない男に見込まれて何か舞い上がっているけれど、行く末が気の毒。才能が惜しいわよね》。一葉は深く傷ついたのでないか。友達が自分に確かめもしないで、怪しげな噂を広めていたのが、この時、分かつたわけですから。

そして十五日、一葉は迅速に行動します。《こんな半井は信用できない、中島師匠に見放されたら私はお終いなんだから》と、尾崎紅葉への仲介も断りに行きます。何も知らない半井家の人々が、またも一葉の島田鬻をほめちぎると、桃水まで「いざや美しく成り給ひし御姿んに、余りもさし込れたる事よ」——《どれどれ雨戸を開けてその綺麗な姿を見てやろうかな》と冗談を言うので、半井家の女性陣は「口の悪き男かな」と笑っています。和氣諱々とした雰囲気の中で、「我も微笑むものから」ものからは逆接です。自分もお愛想で笑つたけれど、「この口より世に無き事やいひふらしつると思ふにくらしさに、我知らずならまへもしつべし」——いつもなら嬉しいはずの言葉が、《この口で軽薄な噂を流すのだなと思うと憎たらしく、知らずに睨んだように見えたかも知れない》と言うのです。そして二十二日、「今しばしのほどは、御目にもかからじ、お声も聞じとぞおもふ……」こんなふう言つて、未練を残しながら、桃水のもとを去っていきます。

一葉は、桃水と絶交する決意を聞いた友達がどう反応したか、日記に逐一記して比較しています。十六日、「田辺君参り合て、種々もの語りす。半井君の事をいふ。此方の縁を断ちて更に都の花などにも筆を取らんといふ相談也。『都の花』は龍子が繋いでくれた雑誌ですが、つまりビジネスの話をしているんですね。桃水はもう頼れないなら、龍子に斡旋してもらおうしかないので、早速その相談をしたことが書かれています。

「田中君参る。これにも半井君のものがたりす。打笑ミながら聞居て、半疑の姿いとよく見えぬ」。田中みの子はにやにやしなながら聞いていて、『半井さんと縁を切ったというけれども、あんた本当かね』みたいな疑いの目で私のことを見ていた。

そして十八日、「伊東君参られたり。百年の知己には何のかくすべき事もなくて、思ふまゝにかたり、思ふまゝに無実を訴えて、君のミは実にはや受給ふと嬉し」と書いてあります。『伊東夏子さんだけは私の言うことを正面から信じてくれて、同情してくれた。この人は百年の友達なんだ』と言っております。次の夏子宛ての手紙も同じことだとか、『皆に疑われても、本当の友達であるあなた一人が信じてくれるんだったら、私はそれで充分』というふう

に、感謝の文面が続きます【資29⑥】。面白いのが、島田鬻のかもじのことが、手紙で触れられていることです。桃水を訪ねるときの島田鬻は、伊東夏子の家に住み込みで働いていた「おとくさん」という人に、わざわざ「かもじ」を借りて結ったものらしい。島田を結うのに必要なものが借り物だったわけですから、この時の髪型がいかに特別だったか、ふだんの一葉がやらないお洒落だったかということが分かります。

その他の経過報告は日記とほぼ変わらないんですけども、一つだけ疑問なのは、龍子のことをあまり書いていないんですね。文学の方は龍子さんが相談に乗ってくれたから、桃水と手を切っても心配ないという書き方をしていない。前日龍子に会ってその相談をしたばかりなのに、それを夏子に詳しく語っていないというのが気になるんです。このへんから想像するに、一葉と夏子の付き合いは、文学上の友達ではないんですね。本当に平凡な一人の娘として夏子と付き合いたいという、仕事抜きの関係だったことがよく分ります。

桃水との関係も、元はと言えば、ビジネスの問題だった。その相手が田辺龍子に変わった。龍子とは文学者としての付き合いをしていたわけで、だからこそライバルとしての気持ちも出てくる。嫉妬のような感情も当然あつ

たはずです。一葉が夏子と龍子を相手に、人柄を使い分けていたといえましょうかも知れませんが、これは関係性といえますか、付き合い方の違いです。龍子は自分が目指し、追い抜くべき先輩で、今は桃水がだめだから頼るけども、結局はライバル。それに対して夏子は、傷ついた時に全て包みこんでくれる心のオアシスのような存在。自分が作家の一葉ではなくて一人の若い娘に戻れる、そういう相手だったということでしょう。「二人の夏子」の関係をもう少し追ってみたいと思います。

「二人の夏子」そして龍子

伊東夏子は熱烈なクリスチャンで、青年会、今でいうYWCAの活動に当時から関わっています。そういう宗教家としての伊東夏子に一葉は距離を感じていた節が日記には出てきます。ただ、夏子の方は理想に燃えていて、一葉との友情も、宗教的な高ぶりと共に一葉への奉仕のように見える部分があります。そういう点で二人にはズレがあるわけですが、ただ伊東夏子が一葉の最大の理解者で、優しく包む存在であったことは動かしようのない事実です。桃水の一件があった後、一葉は夏子にだけは自分の弱い部分を晒し、その手紙も恋文と見まが

うようなものになっていきます。「あはれ行水にかずかくよりはかなき片恋にもこそ似て候へ」などと伊東夏子に呼びかけるんですね。《水に文字を書いてもすぐ消えてしまふ、あなたに対する思いはそれよりもはかない片思いのようなものよ》と書いています〔資32⑨〕。

この手紙は内容からみると、《私はあなたが病氣だった時お見舞いしてあげたのに、あなたは私が病氣をしてもお見舞いに来てくれないじゃないの》と伊東夏子が怒って書き寄こした手紙への返事です。《私はあなたのことをいつも想っているのに、あなたはその十分の一も私のことを考えてくれない》と責めるのです。これに対して一葉は、《確かに私が悪かったけれど、見舞いをするかしないかで思いやりの深さを即断するのはむごい》と逆にこちらも責めている。そして、《こういう気持ちをあなたに分つてもらえないのは片思いみたいだわ》というふうには、宗教上の温度差もありますが、お互いがお互いを片思いと言いつつながら、二人で非常に濃密な関係を築いている点が面白いと思います。

無駄話ですが、プリントに一葉の写真を何度も使いましたのが祟りまして、だんだん五千円札に見えてきました(会場内に笑い)。五千円札のかたが手紙の中でこんなことを仰っていたかと思うと、お札に対する見方も変わ

りますね。そもそも、あれだけお金に困った一葉さんをお札にしまったのが、失礼な話です。一葉さんの性格は今回の講座で色々分かってきましたが、今ごろあの世でさぞかし怒っているでしょうね。(会場内に笑い)

とにかく、一葉と夏子の関係は平凡な友達としての付き合いで、一葉もそこに安らぎを見出していたらしい。下谷龍泉寺町の荒物屋をたたんでもう一度歌の修行、小説の修行に舞い戻ってこようとするとき、それを夏子にいの一番に知らせているんですね【資33⑩】。店をたたんだのは、家賃の問題があつたようで、引き上げる直前に小出繁こいでつばらという先輩から、五十円を借りています。引越しの支度金と、滞納分の家賃と思われます。先行きの不安から感傷的な手紙になっていますが、家賃の件には触れず、『私の気まぐれで引き上げるんだけど、商売はうまくいっていたわよ』と、これがせめてもの強がりでしょう。

この引越しは、田辺龍子の独立に刺激されたということもあります。東京の市内にもう一度戻って、龍子と対抗しなきゃという意識もあつたようです。ただそのとき同盟を組んだのが田中みの子で、伊東夏子には声をかけません。こういう点を見ると、一葉は田中みの子に歌人としての才能を認めていた。けれども、伊東夏子につ

いては、本当に普通の友達でいて欲しい。歌の才能とか小説の才能とかいうこと抜きに彼女とは付き合いたい。そんな一葉の思いが現れているように思います。もつとも当時の夏子は、歌よりも基督教青年会の活動に打ち込んでいて、これでは龍子と渡り合えないと一葉が思ったのも事実です。

伊東夏子という人は非常に純粹で、本当に一葉思いの人でした。一葉の小説が雑誌に発表された時にも大喜びしています【資30⑦】。「むさし野に萌え出し」た一葉が今は都で花盛りだと。桃水の雑誌『武蔵野』と、龍子に紹介された『都の花』。一葉の活躍の舞台となつた雑誌名をうまくちりばめています。夏子はここで、『有名な作家を友達に持つなんて、私は鼻が高くてしょうがない』と喜んでいきます。つまり、一葉と文学の上で張り合う気持ちなどはもうゆめさらなくて、ファン第一号の立場に大満足しているわけです。

ここで龍子と夏子、二人の回想をもう一度見直してみましよう。龍子は一葉についてこんなふうに総評しています。「一方から考えますと、かういふ僻んだ感情が却つて作の上には善かつたのかも知れませんが、拗ねた僻んだ感情や観察が、あの人の小説には総てに見えて居りますので、それが又あの人の作の傑れた所です。さすれば僻

んだ感情や観察力を作った逆境も、強ち呪ふべきものではないかも知れませんが、固より生来の天才が主で御座いましたらうが：【資19ケ】。これに対して夏子の方は、「喜怒哀楽を物語つて夏子さんほど、親身に聞いてくれる友達は、五十年間に、一人も出会ひません。物に付け、事にふれ思ひ出されます。平凡な友達だと、思ふてゐますが、やはり秀れた素質を持つていた人だつたと思ひます」【資19ケ】。

お分かりいただけましたように、龍子は何だかんだと言いながらも、一葉の文才を認めていた。いかに一葉に対する人間的な思いが複雑になつたとしても、文学者一葉を評価する姿勢に変わりはなかつた。僻み根性に才能の理由を求めているのは悪口にも聞こえますが、才能自体を過少に見ているわけではない。一方で夏子は、「平凡な友達だと、思ふてゐましたが」と書いています。つまり十代二十代の若い娘としての樋口夏子を知っていたのが伊東夏子であり、文学者として野心家の樋口一葉を知っていたのが田辺龍子だつた。二人の回想は正反対の一葉の姿を伝えておりますが、実は違うレベルで一人の人物を描き出したものではないか。いずれもそれぞれの真実を語っていたのだと思ひます。

「二人の夏子」と龍子。三人の複雑な関係がお分かり頂

けたかと思ひます。貧しくはありましたが、女性作家が珍しがられる時代で、生前から有名だつた一葉の書き残したものは、紙の切れ端に至るまで大事にされてきました。それらが現在、全集でみんな読める形になつてゐるのは、作家として幸せなことだと思ひます。一葉文学の楽しみ方もそこにあると思ひます。日記はそれだけを読んでも楽しいものですが、残された手紙と対照させてみると、また意外な側面が見えてきて、驚きにつながります。本心とは別に、歌塾の難しい人間関係のなかで、どんなふうにも気を遣いながら人と接しているのかが分かります。

私も今回、色々調べ物をしてみましたが、従来の認識がずいぶん変わりました。正直に申しますと、今まで田辺龍子という人は、嫉妬深くてひどい先輩だと思つていたわけです。しかし、実践女子大学の図書館で伊東夏子あての書簡をみた時には衝撃が走りました。もう《なっちゃん、なっちゃん》と後輩が可愛くて仕方がない書き方をしてあります。伊東夏子にあんな楽しい手紙を出して可愛がついていた龍子は、意外と親分肌の親切な人だつたのではないか。何といつても、桃水の一件で途方に暮れた一葉を、別な雑誌に仲介したのは龍子です。実に面倒見のよい頼れる先輩です。こう思つてみると回想録もまるで違つて見えてきます。貧しい一葉には冷たい言い

方になってゐる所も多々ありますが、個人的な感情とは別に才能を評価する点は立派です。何十年経つても一葉への嫉妬心を丸出しに語ることにすら、彼女のあけつびろげな素直さと言つてもよく、それは娘時代から変わらぬ若さの証だったのかも知れません。一つの資料だけでは、物の一面しか見えてこない。今回私が改めて反省の材料にしたのはこのことです。

「夏子」研究のために——《展示資料紹介2》

最後に資料の話に戻つて、現在調査中のことを申し上げたいと思います。プリントに『夏子』研究のために」と書きましたが、これには意味を込めました。実践女子大学にある伊東夏子の旧蔵短冊は、全部で二六、二点ございます。その内、夏子自身から《これは樋口夏子さんのものだ》として田辺家に伝わつた短冊が四点あります。それ以外の短冊は、萩の舎関係で様々なものが混ざつていますが、これらの中にも「夏子」と署名してあるものが六四点含まれています。問題は、「夏子」が二人いたことです。

まず、伝一葉とされてきた四点のうち、今回調べてみましたところ二点が精巧なレプリカであることが分かりました。全集には原本が田辺家にあるとされていますが、

少なくとも実践が所蔵している分はレプリカです。古書店にご協力いただきましたが、他に残っている数種類のレプリカと比較してみました。通常の肉筆では、文字の画が交わるところに二度墨がのりますので、そこだけ他の部分よりも黒が濃くなります。そういった肉筆の特徴がこれには見られません。

レプリカと言うと聞こえが悪いようですが、展示をご覧になった方はお分かりになりますように、これは山梨に一葉の記念碑を建てた際、夏子を持っていた本物の短冊をもとに作成して配りものにした限定版の複製です。当時の技術としては大変よくできたものでして、これが夏子の手から田辺家に持ち伝えられてきたことは、ただの印刷物とか偽物という位置づけでは決してない。非常に由緒正しい複製で、それを作つたところに夏子の友情の証があるわけです。

それ以外の二点にはやや変わったところがありまして、短冊の上部に小さな紙片が継いであります。ピン留めして展示した跡と思われる。Aの二番の「忍ぶ恋」は、何の飾りもないやや粗末な感じの薄い紙の短冊に書かれていますし【資37A2】、三番の「露をへて」は打雲、または内曇りといつて、青の雲形の模様がついた短冊ですが、表に歌の語句を訂正した部分があつて、裏に同じ歌を書

き直しています【資38A3】。いずれも練習用といいますが、完成品として人に贈るものではないような印象があります。

次に問題となるのは、「夏子」の署名がある六四点の事です。この中にも、もしかしたら大昔のことで夏子自身忘れてしまったけれども、一葉の短冊で紛れ込んでいるものがあるのではないか。そう思っ、記念館の方にお手数をかけまして、署名部分の拡大写真を撮影していただき、比較しました。何か伊東夏子と樋口夏子で「夏子」の書き方に違いがあるのではないかと考えたからです。ところが、筆跡に違いを見つけないのは困難でした。

ご存じのように、歌と書は教養としてセットになっています。これは歌を書き取る必要があるからで、『一葉日記』にも一葉が妹のくにさんと盛んに手習いに励む様子が出てきます。萩の舎の門下生が学んだのは、流麗な線質で人氣があつた「千蔭流」と呼ぶもので、これは加藤千蔭という国学者の、雅を重んじた筆跡を伝えたものでした。皆同じ手本で毎日のように習字しますから、くずし方も線の質も似てくるのが当然です。「夏子」という名前は崩して書くとは非常に画数も少なくなります。伊東夏子と樋口夏子の署名の違いは、同じ個人の筆跡が、体調や気分に変化する以上に小さいかも知れない。だから「夏子」の

短冊は、古書業界でも見極めが難しいことで知られているようです。

筆跡がだめなら、歌の方はどうでしょうか。歌会の記録や歌集で一葉作になっている歌に、「夏子」と署名してあるものが伊東夏子の手許にあつたとしたら、これは樋口一葉の短冊である可能性が高い。伊東夏子がわざわざ一葉の歌を短冊に書くことは、まずないはずで、そう思っ、調べてみますと、六十四点の「夏子」署名の短冊のうち、四点が全集で一葉の歌と認定されています。ただし、それらの歌は「短冊」として残されたものです。【資38B】。

抽出した四点について注目したいのは料紙、つまり短冊の紙の質です。プリントに載せたBの一・二六番、一八三番。これらは先ほど触れました一葉筆の伝承があるAの二番「忍ぶ恋」と同じ、無地の薄い紙に書かれています。しかも、両方「夕のほととぎす（郭公・子規）」という同じ歌ですが、漢字や変体仮名の違うものを使っ、見栄えのよさを比べている。つまり清書前の下書きです。一五七番は「夏子」の「夏」が違うくずし字になっている。これは今回の全「夏子」中一点だけの珍しいものです。一四二番は空色に細かい型押しがある薄手の料紙で、書き損じた同じ歌を、字体を変えながら裏面にもう一度書き直しています。

夏子は萩の舎時代の短冊を、美しく貼紙をした木箱に

納めて大事に保管していました。そのような中に、清書なら分かりますが、自分の書き損じをわざわざ取っておくでしょうか。一葉の書き損じを保管していたのなら分かります。ただ、いくら友達でも一葉自身が友達に書き損じを贈るはずはない。もし一葉のものだとすると、遺品として樋口家から形見分けされたという可能性はあるかも知れません。

以上のように、一葉の可能性がある短冊を並べてみると、料紙が質素であるか、書き損じであるかという二つの特徴があります。こういった形態面で似た特徴があるものを六四点から再度探してきますと、Cの一八一、二二二の二点を選びだされます【資41C】。この二点には同じ「谷のとを」の歌が書かれていて、清書と下書きの関係になっている。下書きの二二二の方は、例の無地で薄い料紙を表裏使い、裏には「庭早梅」という別な歌が書きつけてあります。

一葉は大変紙を大事にした人として、古書業界にたまに出てくる一葉の断片的な草稿には、タイトルと本文の内容が全くかみ合っていない奇妙なものが存在しています。偽物だろうかと一瞬思いますが、一葉は書き損じを捨てない人なんです。裏を使ったり、ちよつとでも余白が残っていると、文章の下書きに使ったりする。タイ

トルだけ書いてやめた紙などは余白が多い分格好の下書き用紙になりました、時期が違う文章が後から書きこまれたりすることもあるわけです。経済的に苦しかったことが大きいでしょう。短冊も上質なものはなかなか買えませんので、練習用で表にも裏にも何度も練習した後で清書をしたものを相手に贈ったのだろうと思います。

ただ、以上はまだ推測の域を出ません。書き損じなら、所蔵者の伊東夏子本人のものだという可能性の方が逆に大きいという見方もあるはず。過度の期待は正しい判断を狂わせる元です。また、全集に一葉の歌として載っているものでも、歌会の資料にあれば確実ですが、樋口家にあつた短冊であれば、伊東夏子から贈られたものが紛れている可能性もなくはありません。

今日のようなお話をいたしますと、どれが一葉の短冊だろうという話に集中してしまいがちですが、逆に言えば、どれが伊東夏子の短冊だろうということが同じ問題としてあるわけです。しかし、一葉全集に載っている歌会資料で、伊東夏子の歌だと分かっているものは、今回の短冊群に含まれていませんでした。これも謎の一つです。

こうなってきましたと、今までの一葉研究で盲点になっていたのは、「もう一人の夏子」の研究だったのでない

か。この思いを禁じ得ません。『伊東夏子歌集』というのが編まれるべきだと思います。それによって初めて、一葉との歌のやり取りや、短冊の違い、あるいは微妙な筆跡の違いといったことが明らかになるでしょう。先ほどの籠子の証言や日記の問題とつながってきますが、樋口一葉だけを見ていたのでは、樋口一葉のことは見えてこない。そういう逆説のような真理があるのだと思います。

伊東夏子を知ること、知られざる一葉のこと、萩の舎のことがまだまだたくさん見えてくるはず。そのための中心となる資料を実践女子大学に納めていただいたご厚意は、何ものにも代えがたく有り難いものです。今回そのご縁に導かれて、台東区立一葉記念館と実践女子大学の文芸資料研究所の連携協力関係が相成り、このような場を設けて頂くことになりました。人と人、資料と資料とがつながること、新しい一葉の姿が見えてくる研究の進展に期待しております。

どうぞ皆様も、これだけ資料があつて、研究し尽くされてはいない樋口一葉の、どこまでも奥深い世界をお楽しみくださいますように。今日そのお手伝いが少しでもできましたならば、私の幸いでございます。長時間ありがとうございました。（会場内から拍手）

講演終了／午後三時四十五分

資料編 二人の夏子―樋口一葉と伊東夏子―

実践女子大学 河野 龍也

一 萩の舎と一葉の周辺

・中島歌子 弘化元（一八四四）一二・一四～明治三六（一九〇三）一・三〇

加藤千浪門人。水戸藩士林忠左衛門未亡人。明治一〇年頃、小石川水道町一四番地、安藤坂に萩の舎を開設。皇室とつながる同門の伊東祐命（すけのぶ）や、母の縁故から鍋島侯爵家の支持を得て、梨本王妃、鍋島侯爵夫人、前田侯爵夫人をはじめ、貴婦人や名家の令嬢が多く入門し、門人は最盛期で一〇〇〇名を超えた。

*

・樋口一葉 明治五（一八七二）三・二五～明治二九（一八九六）一一・二三

父則義のはからいにより、明治一九年八月二〇日入門。当時、下谷黒門町在住。二三年五月より内弟子。九月、本郷菊坂町に転居。二四年四月一五日より、半井桃水を訪問。二五年六月二二日、桃水と師弟関係を解消。二六年七月二〇日、下谷龍泉寺町に転居。二七年五月一日、本郷丸山福山町に転居。

*

・伊東夏子 明治五（一八七二）六・一〇～昭和二二（一九四六）一二・七

日本橋本小田原町の鳥間屋・東国屋の伊東のぶの長女。実父は不明。戸籍上はのぶの弟（入婿伊兵衛）の娘。一歳で萩の舎に入門。二〇年頃は団子坂の隠居所（御鷹餌御用処「会処」）に母と住む。二二年頃、神田南甲賀町に、二七年には牛込新小川町に転居。駿台英和女学校在学中、キリスト教に入信。二五年七月卒業後は青年会で活動。二九年一月二五日の一葉葬儀では、萩の舎から田中みの子と二人のみ代表参列。三二年、陸軍将校田辺与壮と結婚。金沢を経て山口県長府に住む。

*

・田辺龍子

明治元（一八六八）一二・二三〜昭和一八（一九四三）七・一八

明治一〇年頃入門。父太一は外務書記官。明治女学校、東京高等女学校に学ぶ。坪内逍遙の推薦により、二二年六月、花圃の名で金港堂より小説『藪の鶯』を出版。三三円二〇銭の原稿料を得て、亡兄次郎一の法要費用や借金返済に充てたことが、一葉の創作欲を刺激した。二五年十一月、三宅雄二郎（雪嶺）と結婚。

*

・田中みの子

安政四（一八五七）〜大正九（一九二〇）二・二四

松江藩士落合歙蔵長女。明治六年、宮大工田中市五郎と結婚、一六年死別。下谷谷中町に住み、萩の舎に入門。旧藩主松平定安の子女に倣ったもの。家が近く身分的な親近感から一葉、夏子と「平民三人組」の親交を結ぶ。

二 夏子と龍子（花園）——展示資料紹介1

①三宅花園書簡（伊東夏子宛て）

こはつぐはづですがめんどうゆへきつたなり ごめん遊せ
く

ネムイくく アーサビシイく

ケフハカアサマモシナルステサビシイく

かしこ

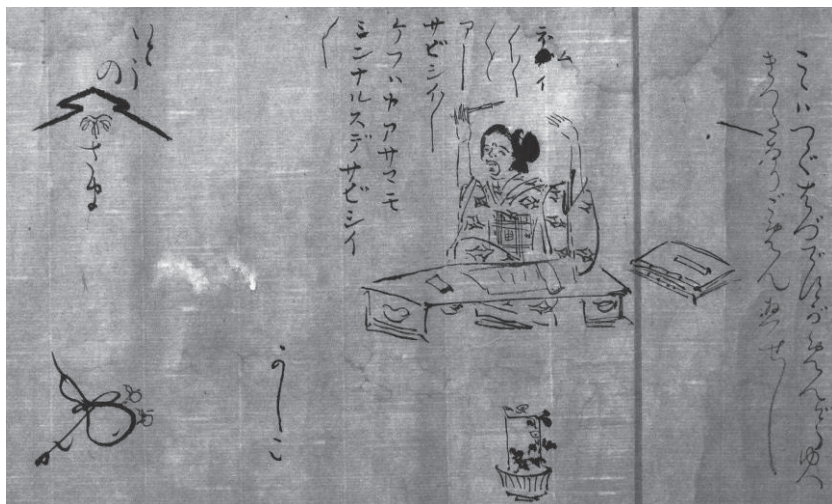
いどうの ■（絵文字）さま

■（絵文字）より

いまごろはなにしてござるな なつ子さん手習してか 哥を
よんでか ア、ねぶいあくびくさみがでる斗 なつは哥よお
こともいやにて人形もはやもちあきてぶづくへにおかぶが
しまで舟をこぐのみ ぶづくえにまたつらづえをつくくくと
おもひまわせばエーちれつたい めとくさいくくくく

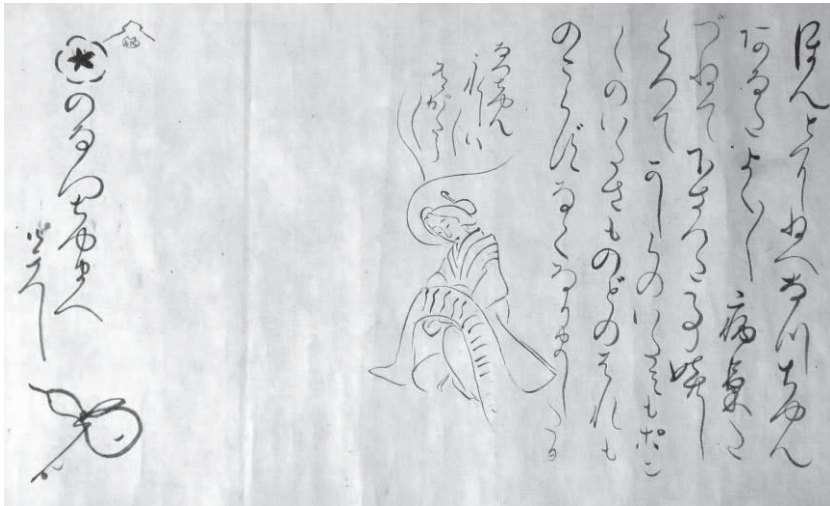
二度めのかしこ

かんしやく玉がはれつしてちれつたいのヨ



② 三宅花園書簡（伊東夏子宛て）

拝見いたし候 御心にかけてさせられ病氣御たつね被下まことにくうれしさつたなき筆には申尽しかたく候 御かけ様にて日々快方におもむき申候間乍憚存候 御休服被下度候 ほときすを御聞被遊候よし 御哥ちようだい有かたく御へん哥さしあげ候はづなからまつくこのつぎまで御免被下度候 わたくし事病中のなくさみにへボれんの三十六哥仙した、め申候 御まへ様は照子事ゑがき申候まことにくかわゆく出来た、今も御なつかしくなかも居候所に御坐候 ついてはかわほりにうちましりてもとかなんとか申御哥御まへ様らしくかわゆくてよからんと照こと申候へとその哥存し不申困り居候 このつきの御在宿は何か御用でも候にや そのへんチキナ三十六哥仙も御らんにいれたし かたく御出なくてはわたくしは泣いだし申かもしれ不申成たけく御出席のやうねかひく候もしく御出御坐なく候は、早々は書にてもかわほりの哥御しらせ願候 先日猿の哥先生に御いた、きのよしゆへ



今に猶上手にいとうなつ子さんさるとはくめてたかりけり なんだかわけがわかりませぬねへ

せん日 ■(絵文字・ひきこ形)をあなたのみにつけないと御立腹おそれ入候 いろく海山御はなしはつきま
せんかまたく かしこ

ほんとにねへなつやん あなたよくく病氣たづねて下さつた事嬉しくつてかしらのいたみもポンくこの
たさもどのはれものこらずなくなりましたヨ
なつちやんうれしく有がたうく ■(絵・文よむ自画像)

■(絵文字)のなつちやまへ

御かへし

■(絵文字・ひきこ形)より

* 田辺家資料を読む会『伊東夏子関係田辺家資料』(平九・三、実践女子大学文芸資料研究所)による。

* 書簡は実践女子大学所蔵

● 絵文字の解説

A 東国屋について

③ 篠田鋳造『明治百話』「日本橋室町の話」(昭六・一〇、四条書房)

地震後に『魚河岸キネマ』のオツ立つた土地が、モトを言ひやア知つてゐる人もあらうが、『東国屋』といふ鳥問屋があつた。鎌倉以来の鳥屋なんで、姓を伊東、紋が丸にもつこうだ。裏がズーツと鶏舎で玉子なんか家の嬪アが、「二つ貰ふよ」といつて、裏へ廻つて、五ツや六と持て来

B 初代市川左団次の「朝顔仙平」

⑥ 松皮菱に鬼鳶（松居桃楼『市川左団次』昭一七・二、武蔵書房）



⑦ 田辺（伊東）夏子『一葉の憶ひ出』（昭二五・一、潮鳴会）

一部の門人の中に、自分でかえ名を附けるのが流行、九代目びいきは牡丹、左団次びいきは葵、紅葉の好きな人は、紅葉のと、手紙には、それを書きました。／夏子さんが、手紙に、落葉よりと、してありましたから、又こんな忘（寂）しい名をつけたと、「落葉なんてよしてちようだい」と、苦情を出しましたら、「父にすてられたわたしは落葉ですもの」と、自分は気にもとめぬようでした。

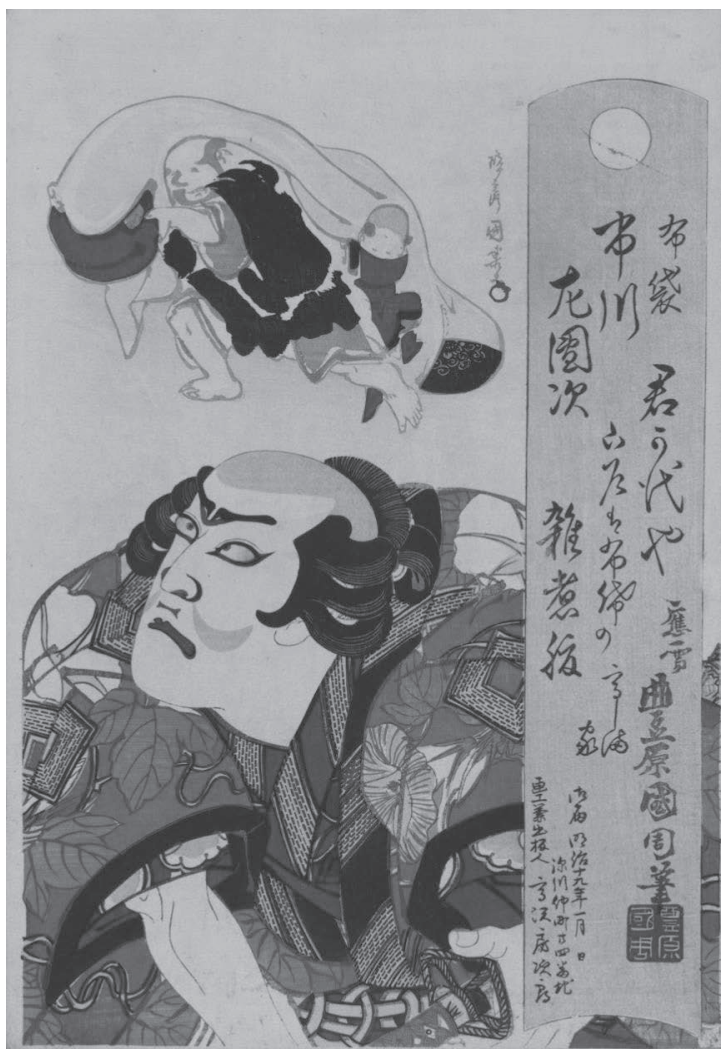


⑧ 歌川国梅画「揚巻 助高屋高助・仙平 市川左団次」(明一七・四、新富座)



* 早稲田大学演劇博物館所蔵 資料番号100-2609

⑨ 豊原国周（くにちか）画「布袋 市川左團次」（明一九・二届出）



* 早稲田大学演劇博物館所蔵 資料番号 007-0970

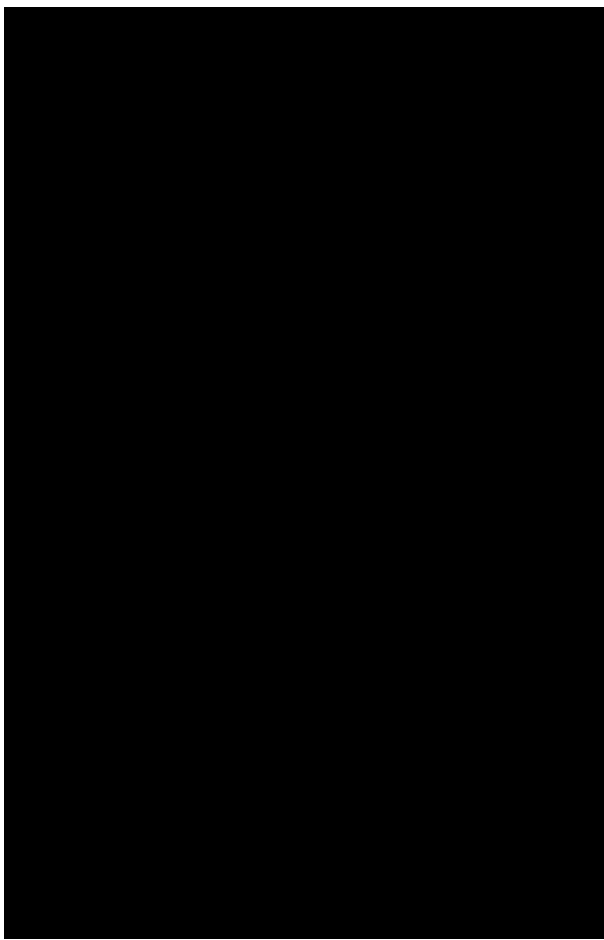
C ひやう

⑩ 田辺龍子『三十六家撰』(明一八頃?)



* 限定版複製・台東区立樋口一葉記念館蔵

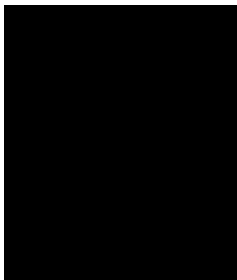
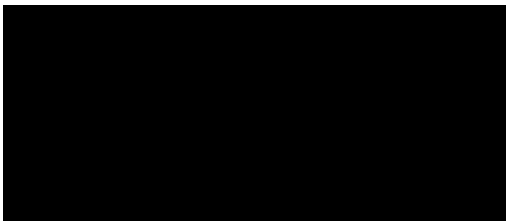
⑪ 『暁齋繪日記』(明一八・一・二九、二・二三)



*上 『暁齋繪日記』明治一八年一月二九日 河鍋暁齋記念美術館蔵

*下右 『暁齋繪日記』明治一八年一月二九日(部分) 河鍋暁齋記念美術館蔵

*下左 『暁齋繪日記』明治一八年二月三日(部分) 河鍋暁齋記念美術館蔵



三 回想録の中の一葉——花園VS夏子

〔出典凡例〕 A 三宅花園（田辺龍子）「女文豪が活躍の面影」『女学世界』明四一・七）

B 三宅花園（田辺龍子）「逝きし三才媛の友」『家庭』明四三・九）

C 三宅花園（田辺龍子）「その頃の私たちのグループ」『婦人サロン』昭六・一）

D 田辺夏子（伊東夏子）『一葉の憶ひ出』（昭二五・一、潮鳴会）

ア. 愛想よし？

【花園】 B ふくみ声の鼻にかゝりてほんとにく〜とくりかへして物をいふ癖ありき。御承知のやうなわけでイヤになつちやつたんですヨとなど身をすりよせていはるゝ、何が御承知なのかさつぱりわからずその儘に聞き流した事もあり。島崎さんてほんとにく〜おとなしい方ですよ、斎藤さんてほんとにく〜おもしろい方でお咄しを伺つてるとあきませんよ、など、訪問せらるゝ其頃の人物評をよく聞かされたりき、すべて如才ない物ごしのやさしいさりとてひた耻に耻かしがる風もなく、少し偏屈にて、何か言葉のはしにむすぼれたるやうな意のこもれるも女の愛敬かとおもはれて人の所謂女学生とはいたく趣ことなるさまなりけり。

【夏子】 D 人の膝に手をおいて、ネ〜〜と言ふたり、人にひつつく様にして、自分から親しみをもとめてゆくなどと云ふ事は絶対にありませんでした。／夏子さんが入門した当座は、下

をこぞみがちで、隣に居た人にも話しもしませんでした。みの子さんが「今度お弟子入りした樋口さんと云ふ人は継子みたいだね」と言ひました。それは強度の近眼で、隣に座つてゐる人の顔も一瞥した位ではハッキリ分らなかつたからでせう。

イ. 生意氣？

【花園】C 明治十九年十一月九日のことであつた。／和歌の道に志をもつ当時の頭門の令嬢を網羅した中島歌子先生の門では、その日、小石川区水道町十四番地紅屋と二三軒しかはなれてゐない先生邸で月並みの歌会を催した。：私達は五目寿司の御馳走になつた。／その寿司を運んだのはついぞ見かけた事のないほつそりとした、小綺麗な十五歳位の髪の毛のうすい娘であつた。すゝめられた五目寿司の盛られた小皿を、ふと見るともなく見るとこんな文句が書きつけてあつた。／「清風徐吹来」／何の気なく江崎さんと私とがこの文句をよみあげると、前に坐つてゐたその娘はさかしさうに瞳を輝かしながら、何となく気まゝり悪さうに小さな声で、／「水波不起」と突嗟の間につゞけたのであつた。これらは有名な赤壁の賦の中の文句である。何しろ当時は国を挙げて歐洲文明に浸（心）酔した時代である。若い娘達は漢学よりも仏蘭西、英吉利の学問を励んだものであつた。それにもかゝらずこの小娘は何といふ小生意気なことであらう。私達は顔を見合はせて驚いたが、すぐ「これが、面白い娘が入つて来ましたよと中島先生が先日仰言つた新参の内弟子なのだ」

とさどつた。／＼この娘が樋口一葉、その頃の私達の間の呼び名をもつてするならば「なつちやん」なのである。

【夏子】D 馴れて来てから、みの子さんや私の、平民組と一緒に、会の時は茶菓をはこぶ手伝ひはしました。(毎月の例会には茶菓、十二月納会には、自宅で手がるな酒飯) 毎月の例会に、おすしの出た事は、一度もありませんでした。

：四五人うちより、一つの問題に付き話が出た時、人の尾に斗付いてゐないで、独立した考へは、言ひましたが、生意気とか傲慢とか、物知りふるとか言ふ感じは、始めから全く無い人でした。

ウ. 不平屋？

【花圃】C 彼女が残した日記に依つても知ることが出来るが、彼女は中島先生が親切を尽くしてくださらなかったことをかこつてゐる。そして、例の彼女流のひがみ根性から中島先生を恨んでゐる。けれども中島先生はなつちやんに対して実に親切であつた。貧しいなつちやんには思ふやうに着物なども買へない。中島先生はよく自分の着物を仕立てなほしてなつちやんに着せてゐらつた。

【夏子】D 夏子さんが、特別に師匠の悪口や不満をもらした事はありませんでした。日記には出てゐるかも知れませんが、もと／＼日記は、焼きすててくれと言ふてゐた位で、絶対に人の

目にふれぬつもりで、作りかぎりの無い、自分の思ひを、述べてゐるのだと思ひます。詞に慎みのある人には、日記は、自分の思ひの発散場所だったので。

工・拝金者？

【花圃】C ある時、多分明治二十五年頃であつたと思ふがなつちやんが私の家へやつて来た。／一時間位、しなを作つては散々しねくねしねくねとした揚句、帰る時に言ひ出したのは、「あの、私、貴女様の御真似を致したのでございますけれど、あの、私のやうな者がそんなおまねをしたいなどゝ申し上げるのは恥しうございますわ……」とか何とかいつてその日はそれで帰つて行つた。／私の真似といふのは原稿稼ぎをするといふことであつた。当時私は、つまらない物を書いては雑誌などにのせたり、また最近には、金港堂から出版したりしてゐた。貧しいなつちやんにしてみれば、こうしたなりはひは濡れ手で粟を擲むやうなぼろい金もうけの方法と思へたのかもしれない。／私はなつちやんの文才を認めてゐたから、すぐに私の知つてゐる限りの出版業者へなつちやんが進出する道を拓いてわたりをつけてあげたことであつた。

【夏子】D 小説を初めたのは、金が欲しいに違ひありませんでしたが、母、妹さんを、養ひたいためで、自分が欲ばると云ふ点からではありませんでした。それを「金に刺戟されたのです本当をいへば」などと、言はれると、拝金者のやうにきこえると思ひます。

オのろけ屋？

【花圃】A 男との交際は沢山ありましたが、まあ皮肉評をする方が多くて、恋（ラブ）に落ちた事は遂に無かつた様です。半井桃水さんとはよく往来がありました。そして半井半井とよく噂が口の上りました。私此間の晩に行つたら半井さんが臥てゐたとか何うとかで、私蒲団を最う一枚懸けてやつたとか何うとか、そんな事をずん／＼話すのです。「貴方そんな事を滅多に話すものぢやありません。人に何とか言はれますよ」と申した事でしたが誰にでも半井さんの噂をずん／＼するものですから果して評判に上（のぼ）りました。

【夏子】D 桃水に、小説を見てもらひ初めました時、独身で好男子だから都合がよくないと、言ひましたので、何か思はせぶりの事を言ふかと問ひましたらそんな事は一度も無いが、此間嫁の申込を、断りましたよと、話したが、そんなよけいの事、わたしに言はずともいいにと、思ふただけと、只それだけで、みの子さんにも私にも、桃水ののろけじみた事は一度ももらしたことはありませんでした。たとへ好きな人があつたとしても、人の前で手ばなしで、のろけるやうな、そんな人ではありませんでした。

カ 猜疑家？

【花圃】C あんなに親しくしてゐたなつちやんと私も遂になつちやんの偏狭な猜疑心から別れてしまつた。／明治二十五年であつたかと思ふ。…二人が私の所へ弟子入りしたのであつた。

／「弟子をとるからには名ひろめの会をしなければなりません」と中島先生にいはれたので、私は可なり盛大な名披露の歌会を催した。／これを知つて怒つたのはなつちやんであつた。／「内弟子である自分をさし置いて、先生は花圃さんを後継者にする気らしい」／それ以来、なつちやんは私に昔日の打ちとけた気持どころか、却つて敵がい心をもつやうになつてしまつた。

【夏子】D　みの子さんも花圃女史も、歌屋の開店をやりましたが、夏子さんにはその資金もなし、師匠の後継者になつて、野々と、やつてゆかうと云ふ、野心は、ありませんでした。又あの人の性質では、純歌屋の、仲間入りは出来なかつたでせう。／花圃女史の初の会の時出席して来ぬので、迎ひをやつたと云ふのは、何かの間違ひで、私と一緒に、早く出席して、快く手伝ひました。

キ　恩知らず？

【花圃】A　逆境の人でしたから、妙な僻んだ感情を持つて居りました。∴先生に対しても同様で、先生の方ではそれは善くしてやるのですが、何うもそれに不足でした。病中も無心を申しやると先生から十円参りました。「先生に願つたら十円……」と然も不平らしく申しますから、「夏ちやん、それは貴方よくない」と申したのですが、後で分つて見ると、其十円は先生が衣服を入質して調達したものでした。

【夏子】D　如才ない処もあり、とりまはしも上手、お世辞も上手に、言ふ事もありましたが、

又一方、世渡りの下手なやうな処もあり、ぺこ／＼頭を下げて有難がつて礼を言ふたり、師匠の事も、讚めて、有難がつたり、金を借りた人に、返す事の出来ぬ、言ひ分（訳）をしたりは決して、しませんでした。その為、花圃女史などは、樋口さんは、感謝の念の無い人だと言ふてゐました。又金を貸した友達は、（大した金ではありませんが）かえさないで、あたりまえのような顔して、平氣でゐると、余り好く思はれて、ゐませんでした。

ク・書生のたまり場？

【花圃】A 家は銘酒屋がかりで御座いませう。それに女ばかりの世帯——男の兄弟もありましたが厄雜で勘当の姿でしたから、母親と夏子と国ちゃんといふ妹と三人きりの女世帯。それに夏ちゃんが又お世辞がよくて、宛然待合のお神様のやうだなどと申された位でしたから自然行き善いものと見えまして、始終男の書生が遊びに行つて居りました。今の馬場孤蝶さんだの、島崎藤村さんだの、其他いろ／＼の書生さんが入り変り立ち変り入り込んで居たもので、稀には薩摩下駄が土間一杯に、足の踏場もない様に並んでる事もあつたほど。近所では書生さんばかり入り込んでる變つた家位に思つてゐた事でせう。

【夏子】D 七十近く成つて、馬場さんに（孤蝶）久し振りにおめにかゝりました時、「一葉研究だの赤裸の一葉だのと、名を付けて、あれだけの出鱈目が言はれてゐるのに、なぜあなた、黙つていらつしやいましたか」と、抗議を持ち込みましたら「又始まつた位に思ひましてね」

と、吐き出すように言はれて「一葉の家の入口は毎日書生の下駄で一ツぱいだつた、なんて、書生だつて、平田や戸川や僕で、そんなやくざな」と、詞をにごされました。／成る程それは、とりよつたによつては、一葉の家に、女義太夫のどうする連みたようなのが、はいりこんであるようにもとれると、領づかれました。

ケ・総評

【花圃】A 一方から考へますと、かういふ僻んだ感情が却つて作の上には善かつたのかも知れません。拗ねた僻んだ感情や観察が、あの人の小説には総てに見えて居りますので、それが又あの人の作の傑れた所です。さすれば僻んだ感情や観察力を作つた逆境も、強ち呪ふべきものではないかも知れません、固より生来の天才が主で御座いましたらうが……

【夏子】D 喜怒哀樂を物語つて夏子さんほど、親身に聞いてくれる友達は、五十年間に、一人も出会ひません。物に付け、事にふれ思ひ出されます。平凡な友達だと、思ふてゐましたが、やはり秀れた素質を持つていた人だつたと思ひます。

四 一葉と花圃

①花圃書簡（一葉死て） 明治二五年七月二日

：一昨日ミの子様御来訪かねて御咄しの事承り申候。いろく御事情も承りおよび、御きの毒に存じ候。やすく御うけ合は申候もの、随分御承知の通り青蠅なす蚊学者の候世の有様、思ひ通りに行けばよいがと氣遣はしく候。乍然、心の限りのりたのミて致し見可申候。夏向ハ昼寐の伽に読人も多しとか聞居候故、可相成ハ早き方可然と存じ候。又同じやうなものいくつも御こしらへに成候よりは、一ツに尽力遊しておどろかれ候やうなるもの一



ツ御こしらへ被遊候様存じ候。：理屈はつた事申やうなれど、人はまごころが肝心にて、わらつて咄す時斗が友にハ候はず。泣てかたる時の友こそ誠の友と存じ候。私くしかなり身に不相応な辛いも酸もなめしゆゑか、君の事承りても浅からぬ御同情を持居候。何とぞ御心の中打明られ、元来浅学無識何の御役にもた、ねど、泣てかたる友否姉妹ともおぼしめされ被下度し。：何とぞこの上の願は、万事御勉強ありて、後世にも残るべきもの御著しあり、当代の紫式部とも清少納言ともてはやされ給はん事に御坐候。：わたくしは一番君におもきをおき居候に御坐候。何とぞくたぐさみなど、いふ私くしのやうなのハ極々くくあしき事故、一生懸命に御成遊して、御心を高潔に、おもひをこらし給ひて、よの中的女といふもの、名誉をも御起し被下度し。：

②一葉書簡（花園宛て） 明治二五年八月四日

おもひのほかの御無沙汰申訳なきが日々心の中にてもつれ合申候。実は先月中に是非く小説完備いたし御教へを受度と存じ居候ひしに、廿三日の稽古日より俄に肩のはりつよく、其後はげしき脳の痛みに成り、当時は帰宅いたし居候。尤もほんの一時のこと、見え、追々よろしき傾きになり候ま、

近々全快可致、只々御前様折角の仰せに対しこの様に長曳き居候事、お侘の

いたし様もなく、且は御立腹でも遊ばさは、真にくいたし方のなき身ゆゑ、夫のミニ心配に存じ居候。

先日参上の節も不足のなきおしやべりを申ながら、まだく御話しせねばならぬ事情も種々あり、と角御見捨なき様とのミ祈り居候。お父様にも御母様にも先日の御礼よろしく仰せ上いたき度、私し生来の不調法にて有難きことあり難げに詞にも出ず、筆とりても同じくにて、只々心におもふのみに御坐候。うぬばれたる申条なれど、もしく友のかたはしとも思し置れ候へ、其失礼は御見のがしいたき度。何か申し上ること多き様に御坐候へど、脳のかげんにや、何事もまとまり不申、其うち参上のふしと申残し候。かしこ。

此ごろの月よに例のやれ垣にむかひて、

よもぎふにさし入る月のかけミればよは捨がたきものにぞ有ける



*一葉画像は、樋口智子氏所蔵

③ 一葉日記「ちりの中」 明治二十七年二月二十七日

田中君を牛込に訪ふ。…柴又に参詣して留守也。…(神田)多丁に手遊類かひて又ここにかへる。田中君
帰宅を待てかたる。伊東のぶ子君も折ふし来訪、談は中島の師が上なり。品行日々にみだれて各いよ
く甚敷、歌道に尽すころは塵ほども見えざるに、弟子のふえなんことをこれ求めて、我れ身しりぞき
てより新來の弟子二十人にあまりぬ。「よめる歌へ」と問へば、「こぞの稽古納めに歌合したる十中の八九ハ
手にハとののはず、語格ミだれて歌といふべき風情ハなし。坐に他の大人なかりしこそよけれ、なげかはし
きおとろへ方」と聞ゆ。田中君などが、「詠草一月にも十月にも満ぞくに直しなど与へられたる事なし」と
いふハ、偽のみにあらざるべし。…「かゝるが中にこの有様を知りつくしたる龍子ぬしが、これに身を投じ
て家門を開かんとす」と聞こそ、おぼろげのかんがへにハあらざるべし。「…師が甘き口に酔ひて、我が才
学のほどをもおもはず、うきよに笑ひ草の種やまくらん。すべててんぐがたきの世」とかたる。「いでさ
らば、何事をも言ハじ、おもハじ。我ハもとよりうきよに捨て物の一身を、何のしわざにか歎くべき。田中
ぬしハしからず。なまなかあらはし初たる名を末弟におされて、朝の霜の此まに消なんいかに口をしか
らずや。師に情なく、友に信なくとも、何か又そは厭ふにたらず。念とする所は君が手腕のミ。…いかで
万障をなげうちて歌道に心を盡し給はずや。我れもこれより君が為におよぶ限りの相手にハなるべし。
…我ハ今まで小商人の歌よむことをもなきざりしかど、君ハ常におこたりなくつとめ居たまひしに相違あ
るまじ。まが玉をみかくに他山の石を以てすとか。一人にていかでか」とす、む。「君にそのころおはしま
せば我が喜びハ上もなきぞ」と田中ぬし喜ぶ。此人もとより汚濁の外にたちてすみ渡りたるころならぬハ

しれど、おもて清くしてうらにけがれをかくす龍子などのにくいやしきに、よしけがれはけがれとして、多数のすてたる此人にせめてハ歌道にす、む方だけをはげまさんとて也。右もにこれり左もにこれり。師も龍子も此人も何れにござりのうちなるを、あれをすてこれをたすくるハ、時のよはきを見るにしのびず。人ハたのまぬ義をおこして我れから苦悶に身をなやます我が浅はかさ、あはれむにたえたり。ものがたること多くして日も暮れぬ。

④花圃書簡（一葉宛て） 明治二七年五月七日

土曜には候へども、もしやと待わたり候ひしに、御出席なき事、一人も多くと願候に、まして御前様の御姿のなきは、いかに人々も本意なくおもひし事と存候。御哥有がたく候。いづれハ御まのあたりに。かしこ。

五 一葉と夏子

伊東夏子「わが友樋口一葉のこと」〔婦人朝日〕昭一六・九

・私は母に連れられて十一、二のころから弟子入りしてをりましたが、一葉女史は十五の歳に入門、私よりズツとあとになります。しかし一葉女史も明治五年生れなら、私も明治五年生れの同い歳、名前も二人とも同じ夏子——その同じ夏子を区別するために、樋口さんはヒ夏ちゃん、伊東姓の私はイ夏ちゃんと呼ばれてゐました

・よほど近くへ寄らなければ、誰だかもわからない、ひどい近眼でございました。歌がるたなどを取る時には、かるたに噛みつくやうに眼を近づけてをりますから、樋口さんの頭が邪魔になつて、私どもは取りにくうございました。それで、あんたの頭でかるたが見えないから眼鏡かけてちやうだいよと申しましたけれども、厭だといつて、どうしても、眼鏡をかけないのでございます。

〔参考〕一葉書簡（田中みの子宛て） 明治二五年一月二日

御書拝読、昨日はわざわざ御入来難有、乍例の失礼御海恕ねがひ上候。さては歌がるた御催しの上、拝見にても願度候へど、例の近眼、とても一人前の通用は六つか敷、さりとて、半人部類へ御編入にては、など、ぜいたくを申のにはこれ無候へども、「枕の草紙」の「物は」の中に、「勞して功なきもの、近目のかるた取らんとする」とか有る様に御座候ひし。失礼の御所は、私より申上候のみならず、お小言は眼に仰被下度候。かしこ。

⑤ 一葉日記「しのぶぐさ」 明治二五年六月一日〜二日

中島の老君病いよ〜あつしとて我を迎ひの手紙来る。…それより唯ねぶりに眠りて三日の午前十一時といふに空しく成りぬ。…このほどの二日三日、ひるなく夜なく立かはり入かはる人、さしも狭からぬ家ながら、唯ミちにミちていさ、かの間もなし。…六日の午後、野辺送りの作法をす。…伊東夏子ぬしどおのれとこしわきの役をなす。…式場にての作法よりはじめて、墓処に柩おさめ給ふまで、え書つゞけやらず。まして師の君の心いかならんかし。…人々もおの〜家に歸るに、おのれも又半井うしのもとよりいふ事ありとの文もあり、今宵斗はとて歸る。

七日 「何は置て半井うし訪て見よ」と母君もの給ふに、ひる少し過る頃より行く。例の従姉妹の君もおられたり。おのれいつも取立たる髪など結はざりしを、島田といふものになして有しかば、人々めづらしがる。「是よりは常にかくておはせよかし。いとよく似合給ふを」などいわれて中々に恥し。半井ぬし扱の給ふやう、「種々に御事多かる中を、さぞ出がたくやおはしけん。実は君が小説のことよ、さまざまに案じもしつるが、到底給入の新聞などには向き難くや侍らん。さるつてをやう〜に見付て、尾崎紅葉に君を引合せんとす。かれに依りて読売などにも筆とられなば徳多かるべし」…

夢の様に十二日にも成ぬ。十日祭の式行ふ。ことに親しき人十四五人、招きて小酒宴あり。伊東夏子ぬし不図席を立て、我に「いふべき事あり。此方」といふ。呼ばれて行しは次の間の四畳斗なるもの、かけ也。「何事ぞ」と問へば声をひそめて、「君は世の義理や重き、家の名や惜しき、いづれぞ。先この事問まほし」との給ふ。「いでや世の義理ハ我がことに重んずる事也。是故にこそ幾多の苦をものぐなれ。されど

家の名はた惜しからぬかは。甲乙なしといふが中に心は家に引かれ侍り。我斗のことにあらず。親あり兄弟ありと思へば」といふ。「さらば申す也。君と半井ぬしとの交際、断給ふ訳にはいかずや、いかに」といひて、我おもてつとまもらる。「いぶかしふもの給ふ哉。いつぞやも我いひつる様に、かの年若く面て清らになどあれば、我が参り行ふこと、世のはぐかり無きにしも非ず。…されど、神かけて我心に濁りなく、我が行にけがれなきは、知り給へぬ君にも非らじ。さるを、などこと更にかうはの給ふぞ」と打恨めば、「そは道理也」。さりながら我かゝることいひ出づるには故なきにしもあらず。されど、今日は便わろかり。又の日其訳申さん。其上にも猶交際断がたしとの給んに、我すらうたがはんや知れ侍らず」といひたく打歎き給ふ。いぶかしともいぶかし。…

十四日 …ものに寄り集ひて世の中の物がたり共す。あやしうにされる世のならひとて、聞え出ることぐくに、けがらはしからぬもなし。…聞と聞まに、人の上のミならず我がよ所の聞えも覚束なく成て、席のはしに耳かたぶけ居し我、不図師の君の前にいざり出ぬ。師は物語りやんで、臥床に入らばやと身を起す時也。「師の君しばし待たせ給へや。我少し問ひ参らせ度こと、聞え参らせ度こともあり。…半井うしことは、かねて師にも聞かせまつりて、其人となりも身の行ひもいとよく知り給ふ上にて、我が行かひをも止め給はざりしなれば、我心に憚かる処いさ、かもあらず。…もとより知らせ給ふ様に、我より願ひての交際にも非ず。家の為、身のすぎわひの為、取る筆の力にとこそため、外に何のことあるならず。さるをか様に人ごとなどのしげく成るなん、いと心ぐるし。哀、師の君の御考案はいかにぞや。…いかさまにして、いかさまにすべきにか、御教へ給らまほし」といふ。師の君不審氣に我をまもりて、「扱は

其半井といふ人とそもじ、いまだ行末の約束など契りたるにて、「無きや」との給ふ。「こは何事ぞ、行末の約はさて置いて、我いさ、かもさる心あるならず。師の君までまきなき事の給ふ哉」と口惜しきまでに打恨めば、「夫は実か、真実約束もなにもあらぬか」と問ひ極め給ふも悲しく、我七年のとし月傍近くありて、愚直の心と堅固の性は知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給ふが恨めしく、人目なくは声立ても泣かまほし。師の君さての給ふ、「実はその半井といふ人、君のことを世に公に妻也といひふらすよし、さる人より我も聞ぬ。おのづから縁しありて、足下にも此事ゆるしたるならば、他人のいさめを入れるべきにも非ず。もし全く其事なきならば、交際せぬ方宜るべし」との給ふに、我一度はあきれもしつ、一度は驚きもしつ、ひたすら彼の人にくつらく、哀、潔白の身に無き名おほせて世にしたり顔するなん、にくしともにくし。：田辺君田中君なども此事を折々にかたりて、我が為いとをしがられしとか。さるは、「世の聞えもよろしからず、才の際なども高しともなき人なるに、夏子ぬしが行末よ、いと氣のどくなるものなれ」などいひ合へりしなりとか。：

十五日 午後より半井君のもとへ至る。梅雨降づく頃にていと侘し。：いと子の君、伯母なる人に向ひて、「御覽せよ。樋口様のお髪のよきこと。島田は実によく似合給へり」といへば、伯母君も、「実に左也く。うしろ向きて見せ給へ。まことに昔しの御殿風覚えて品のよき鬘の形哉。我は今様の根の下りたるはきらひ也」などいひ給ふ。半井君つと立て、「いざや美しくう成り給ひし御姿みに、余りもさし込たる事よ」とて、雨戸二三枚引あく。「口の悪き男かな」とて人々笑ふ。我もほ、笑むものから、あの口より世に無き事やいひふらしつると思ふにくらしさに、我知らずならまへもしつべし。我師の君より教へられつる

様に、ことつくりひても語りす。「師の君のもとに、家の内取まかなふ人なく、我行き居らではもの毎に不都合也とて、いとせめて頼まれぬ。さるを無下にはなど断はらるべき。…さすればいづぞや仰給はりし紅葉君のことも何も、先え寄りの事ならずは折角御目通りしてからが筆も取りがたくは、其かひあるまじく、お前様へ不義理にも成り申べし。この事申さんとて、今日はいさかひまもとめて参りつる也」といふ。…

十六日 田辺君参り合て、種々もの語りす。半井君の事をいふ。此方の縁を断ちて更に都の花などにも筆を取らんといふ相談也。久しう遊びて帰らる。

十七日 田中君参る。これにも半井君のものがたりす。打笑ミながら聞居て、半疑の姿いとよく見えぬ。終日かたりて帰る。文しためて、伊東君へ送りもらひ度よし託す。

十八日 伊東君参られたり。百年の知己には何のかくすべき事もなくて、思ふまにかたり、思ふまに無実を訴えて、君のミは実にや受給ふと嬉し。…

廿二日 家に帰る。…半井うしのもとに返すべき書物もて行。折から午前成しかば君はまだ蚊帳の内にうまいし居給へり。ゆり起さんもさすがにて、しばしためらふほどにひる近く成ぬ。…情にもろきは我質なればにや、是を限りに今よりは参りがたしと思ふに、何ごと、なく悲しくさへ成ぬ。…「…実は我がかく常に参り通ふこといかにしてもれにもれけん。親しき友などいへば更に、師の耳にもいつしかいりて疑はる、処かは。…我君のもとに参り通ふ限りは、人の口ふさぐこと難かるべし。依りて今しばしのほどは、御目にもかゝらじ、御声も聞じとぞおもふ。…」…

⑥ 一葉書簡（夏子宛て）

明治二十五年六月十八日

伊東夏子宛

梅雨のそらいかゞ暮し給ふらん。…扱もこの二三日のほどにさまざま御話しいたすこと重り申し候。天がした四ツの海ひろしといへど、心をしる友少なき世なれば、何方にまことをと打明し候とも、何の甲斐はあるまじく、昔のしたままで此浮名す、がれずや候はん。さりながら百人の友に疑ひを受ぬるとも、一人まことの友に誠をしられなば塵恨ミとぞんず間敷、君ならでこの無実の名訴へ参らせんかたもなければ、斯くも書きつづけて御目を煩はず也。



先何を置て、十日祭の時の御心づけ、私のちあらん限り御恩わするまじく、お前様なればこそあの様にも仰せられしなれ、いか斗世の人はしりうごとしてあざ笑ひけん、思ふも中々はつかしく候。…師の君をはじめとして十分疑ひを抱き居られ候ひし由。…「このこともし実ならずは、すみやかに手を離れて、田辺君がいつぞや仰せられし様に、都の花の方に御依願いたす、将来の身の為なるべし」と御さとしもあり、且はお前様先日の御詞にも、「其かた宜しかるべし」との御心づけもあり…一昨日先方へ参り、断りの手段に相成申候間、何とぞ御休神願度。実は今日、田中君御来訪に相成候ま、右の訳御話し申上、再度の御周旋ねがひ置候ひしが、或はまだ御疑ひの去り難きふしもやあらむ、何となき御詞に其御様子相見え申すことの心ぐるしく、しのびて胸いため居候。先日も仰せられし通り、女子の身の疵は是を置て外に有間敷、私何の罪有てにや、かゝる浮たる名を取り候こと、終世の恨ミ是に過ず、口惜しこの限りに御坐候。さりながら余人はともあれ、御前様斗は事情少しは御察し、曇りなき心のほども御覧じ

知らせ給ふべく、誰れは何と申す共、知る人にさへ知られ参らせなは、随て心はおのづからに清かるべく、うやむやの胸すく斗筆に任しまゐらせ候。くやしさのたまりをも、恨めしさのつもりをも、御まのあたりに而万々御話しいたし度、其内参上可申ながら、先はあらまし申上置候。

是はおとく様に申候

かしこ

嶋田のかもじ長々拝借、千万申訳なく、つむりよりは返上致し置候ひしかども、いまだ持参いたすことが出来ず、嘸かし御立腹、御許容願上候。拝顔の時に打なりける也御十分に御せめ遊ばすべく。御詫。

十七日夜

なつ子

かしこ

⑦夏子書簡（一葉死て） 明治二六年四月五日

過日は雨中を御おどろかせ申し、御のうを長き間拝借致し候事、難有厚くく御礼申上候。：はからず御母上様御妹子様に御めもじ申上候事、御嬉しく存候。静なる雨中御まへ様の御ためには一時一万金の御ねうちと存し、俗人が御さまだけ致候御事、誠に心なきわざに御座候。何とぞ御ゆるし願上候。都の花の花のかをり、あのまきのうちになる物なくと存候。たゞに私の欲見のミならず、だれもさやう申し候。私ハ実に嬉しくくくくく、むさし



野に萌え出し一葉、此林の花も紅葉もしのぎて茂りゆかん事遠からずと存候。その一葉はだれあらん

おのれの信友と存じ候と、私のひくき鼻も一丈斗に相成申候。あはれ日本の女文学の花と末の世にも御名の残り候やう、ミのある御作の出ん事ひとへにねむじ入候。… 尾花より

⑧夏子書簡（一葉宛て） 明治二十六年二月九日

過日は久々くにて御めもじ御嬉しく存上候。その嬉しさのあまりを龍子君ミの子君へもらし候所、両方よりいやミ雨の如く、我ひとり君にとはれしをほこり居候。龍子君のいやミは、「駿河台まで御出にて番丁へ御出ないとハ、御あしをしミといふ物。私たちの道ハあまりひどい」。ミの子君のは「夏子さんの所へ御出にて、私共へお顔もおミせ遊ばさないのハひどい。そんなに人わきを遊ばす物でハない」。右の如くに御座候。私は、「御まへ様は多町まで御出ゆゑ、それで私共へ御立寄なされたので、わざく御出でハなき事」と、御まへ様の申わけを致し候。しかし、ないくはうぬぼれ居候。先日は嬉しさのあまり我を忘れて種々の事を申上、あとにて御はづかしく存上候。けつして私ハ立派なるかんがへをいできてハ居不申候。たゞ私の心にある事は聖書より学びたる事のミに御座候。なにか別に私が高尚な理想をいだいて居る者とおぼしめし被下まじく、くれぐれも願上候。…

（※参考「午後まで物がたる。宗教のこと哲理のこと、中々につき難し。』につ記」明治二十六年五月二十九日）

⑨ 一葉書簡（夏子宛て） 明治二十七年三月？

うきよに才子といふものあり。詞たくみに、文辞うつくしく、仕業の上手なれば、見る人十が九まで誠と信じて、うれしく頼もしき人と申すぞかし。我が如き、八重もぐらの露にすぎり、はては塵塚のすみに捨られて、うきよにほどこすべき智恵も持たぬ身は、かくとおもふ心を詞にすぐのべ難ければ、黙々として過る月日のころに、愛も信もはなれずながら表にあらはれねばこそ、此のほどの様なる御恨も承るなれ。君がおぼし給はる十分の一も、我れにおもふころなしとは、さても情なき御詞哉。知らせ給ふ如きかたくなる身は、此広きよに心あふべき友もなく、君一人をこそとおもふに、その君にさへかくうとまれ参らするをおもへば、我運命は誠にはかなきものに御坐候。君は富家に生れさせ給へり。我れは貧裏に人と成りぬ。そもくこれすらことなるに、学ぶ処おなじからねば、君は宗教の門に入り、我れは虚無の空理に酔ひて骨を野外にさらさんとき、平常の持論たがへりとして君は見もかへりたまはざるか。我れは宗教家たる君が一生を道に尽して終り給はんことをのぞむ。とる道ことなりとても、信友は信友なり。いづくに隔つる心ありてかなほざりになすべき。君が病ひの床に訪へざりしは我があやまりなれど、こゝろあやまり也。我が病ひをとせ給ふ君に深きころありて、とはぬ我れをこゝろ浅しとせめ給ふはむごからずや。我れは君に：浴したる事もあり。そもくかゝる事を信なき友にかたたるべきか。はた又我れを軽薄浮佻のともがらと見なして、慈愛ふかき君がころをあざむきたりとおぼすか。：君のすてさせ給ふもよし。君のうたがひ給ふもよし。我れは一筋に君を頼みて心の友とな



してんか、あはれ行水にかずかくよりはかなき片恋にもこそ似て候へ。…さりとは

わか草のつまにもあらぬ君故に我はき、すの音をさへぞなく

もれなばうき名のおそろしく候

伊 夏子様 御前

樋 夏子

かしこ

⑩ 一葉書簡（夏子宛て） 明治二十七年四月末

さる比、御前様の御詞に、友情の至深なるもの語を承りたる事は有しが、よもそれ程にはなく、私はけなしたるものに御坐候。さて昨日の御哥に、「いぶせき中を」と仰せられたるあれを拝見いたしたる時に、私は真に涙をこぼし申候。うぬぼれのつよさよと笑はせ給は、それまで、偽はの給ふ間敷、御前様の御実情より出たるものとおもへば、うれしき様な勿体なきやうな、何ともいはずかなしき様にもおもはれて、たゞく私はお前様の可愛く、御文を



抱きてむせびなきたるに御坐候。笑はせ給ふな。花色衣うきよの恋はしらで、枯木死灰の如き我れにもこの涙は御坐候。おもへば我恋の本尊はお前様に御坐候。われはうきよの誠をみとめ得たるにもこそ候へ。今日よりの小説、もしくは哥、文章の何方にも、君がおもかけをむねにうかべて筆とるをばゆるし給へ。私は御前様の御名をおもひ出る時、ころのいきる様におもはるればに御坐候。…我は近々に商人を

やめに致し可申候。そもくはじむる時、多くの人に笑はれたるに候へば、やめになす時、いよく人は笑ひ可申候。笑ふ人は笑ふべく、そしる人はそしるべく、何方にてもよろしきに御坐候。…されども商ひは失敗致せしには御坐なく候。いよく隆盛の様に成しに御坐候。われながらよく売こみたりとおもふほどの店に成たれど、われに秋風のたちたるか、又例の持病のこにも起りて、離縁のなし度成たるものか、定操なしとてとがめ給はゞ夫までに御坐候。

なつ子

かしこ

⑪伊東夏子「日記」 明治三〇年三月一日〜四月二四日（断片）

廿二日 晴天さむし…齋藤正太夫の君きたれり。談ハ樋口君のことのみなり。ニツ三ツをしるす。

私 樋口さんをあなたのおつしやるヤケにしたのもステバチにしたのもひがみがあるのといはせたのも、みんな世の中の人があるのです。世の中が樋口さんをさうしたのでございます。

正太夫 でも、世の中いつでもこんなものでハ有ませんか。…

私 あなたハ樋口さんを、利己の人だとおぼしめすか。

正太夫（少しかんがへ）いいへ、私ハさうハ思ひません。もし利己といふ事斗がみえたなら、それハやむをえずさうされたのです。…

私 私ハ誤解されたくもないが、かひかぶつてもらひたくもないと申しましたが、どちらかと申せば、樋口さんをかひかぶつてもらつてか、れた方が、一寸みたくころハ嬉しうございます。

正太夫 さうですかね——ほめるのもい、が、おみこしをかつぐやうにやたらにもちあげらるのハ、私ハきらひです。今まで樋口の事をかいたものハ、みなおみこしにかつぐやうなの斗です。あなたハあれでもい、のですか。

私 それハあなた、おみこしをかつぐやうにする人ハ樋口さんをこくよくしつてをる人でハないとハ思ひますが、まづ一寸みて嬉しうご座います。友だちの人情でご座いませうよ。…

正太夫 つまりあの人ハ樋口君をさす、多く誤解されてみた人ですね——。…人ハしられないで、つちの下にうづまつてしまふのが多いですからね——。

私 さうでございます。いつも。…

正太夫 わたしがはじめてあつた時にハ、非常に謙遜してゐてはなしができなかつたくらひでした。それからわたしハ、そんなに謙遜してハはなしがしにくいとい、まして、つまり謙遜ハ傲慢の内証ですからね——。…

私 樋口さんハ、まさかそんなにばからしい謙遜を私にいたしましたませんでした。三宅さんの小説を、あのわたの作ハいつも道徳といふ事がはなれないが、奥様母上として小説をかくハあれでなくてはいけなとい、ほめてハをりましたが、とても私のおよばぬところだなどといひませんでした。

談話ハ三時より日のくれるまでつゞきたり。又、こまかき事を思ひ出してくれとわれにたのみて齋藤君ハ帰る。

廿三日 晴天変らじ…まだ日も入らぬ前なれば、教師の君よりたまはりしりんごをなき友人にそなへん

と、福山町樋口氏の家をさしてゆく。樋口君の門より二三軒まへにくれば、ふと有し世の事思ひ出てうらかなしく、足のすゝみおそく心をはげまして家にいたりつけば、母君も国子君も家にみまして、ゑがほもて我をおかへ給へど（伊東さんよくいらしつてね——）と今一人の友の声この世にきかれぬがかなしく、座しきにとほれば次のまに、ふし給ひしおもかげ、さてハしろき棺のすゑられたる前にて国子君と二人なきになきし事など、青うひや、か成しなきがらなど心にうかびてハ、涕ならぬものもなし。母君のつ、がなくましますをみるも、をしからぬ命ゾやかこち給ふらんと思ひやられていひ出る詞もなければ、日々なげく斗をかなし給ふととへば、ただ寝て斗とこたへ給へり。たへぬかなしさをせめて夢のうちにものがれんとて、しばしば寝給へるにか、母君の心をしはかるもいみじ。…

*島谷純「緑雨・夏子のみた一葉―残された伊東夏子の日記から」『成蹊国文』昭五六・一二二 紹介本文による。

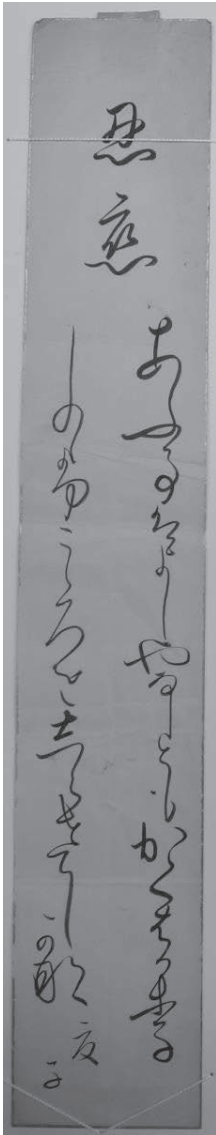
六 「夏子」研究のために——展示資料紹介2（「田辺夏子旧蔵短冊」二六二点の謎）

A 伝一葉筆「夏子」短冊 四点

*この内二本は、田辺夏子旧蔵の一葉短冊の複製（図版省略。筑摩版全集四下「短冊・葉」22・54）。大正一一年一〇月、現山梨県甲州市に「二葉女史碑」建立の際、式典で配られたもの。精巧な木版油印で、田辺家由来の由緒正しい複製である。大塚巧芸社版。以下はこれを除く二点。全集には収録されていない。

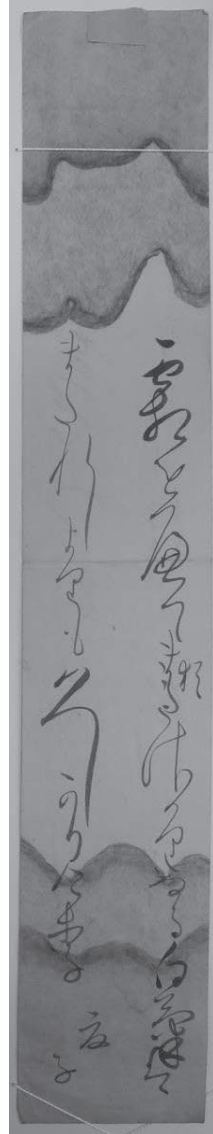
2 忍戀

あふ事はよしやなしともかくはかりしのおころをしらせてしかな 夏子



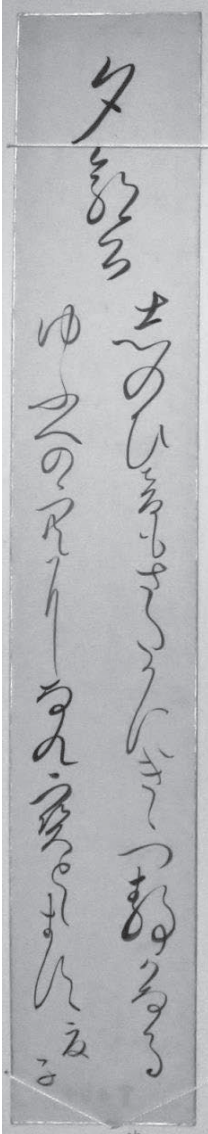
3 表
霜をへてまた(猶)さかりなる白菊は／またれしよりも久しかりけり 夏子

3 裏
霜をへて猶さかりなるしらきくは／まちしほどより久しかりけり 夏子

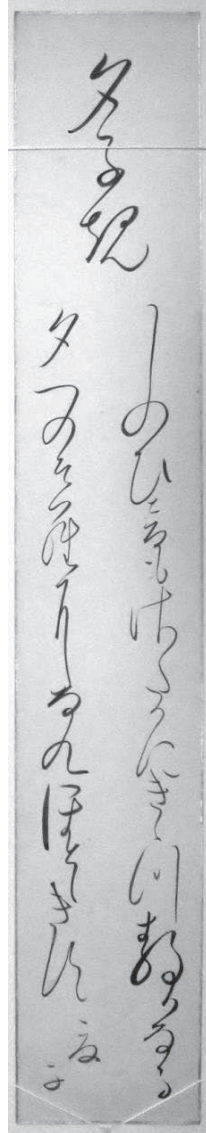


B A 以外の「夏子」署名の短冊 六四点 (次の四点は筑摩版全集に一葉の歌として収録)

126 夕郭公 しひ音もさたかにきつ静かなる／ゆふへの空になくほととぎす 夏子

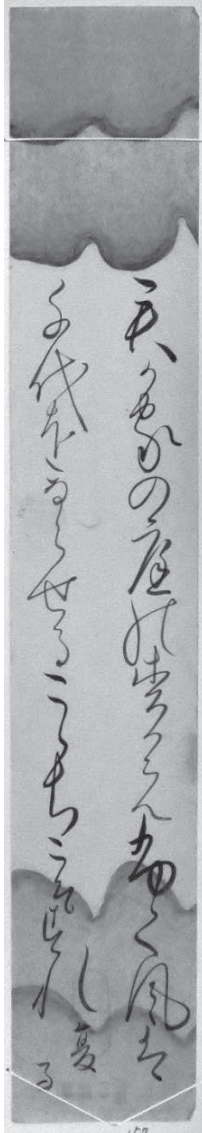


183 夕子規 しのひ音もさたかにきつ静かなる／夕へのそらになくほどきす 夏子



筑摩版全集四下「短冊・葉」50

157 君か家の庭の松かえふく風は／千代をならせるこちこそすれ 夏子

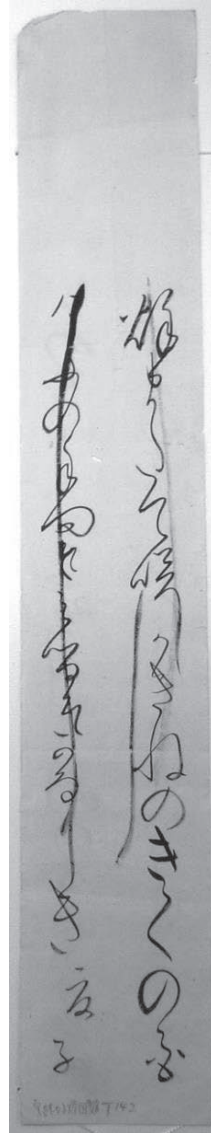


筑摩版全集四下「短冊・葉」24

142 表

秋またて咲しかきねのきくの花 / けふの手向とみるそかなしき

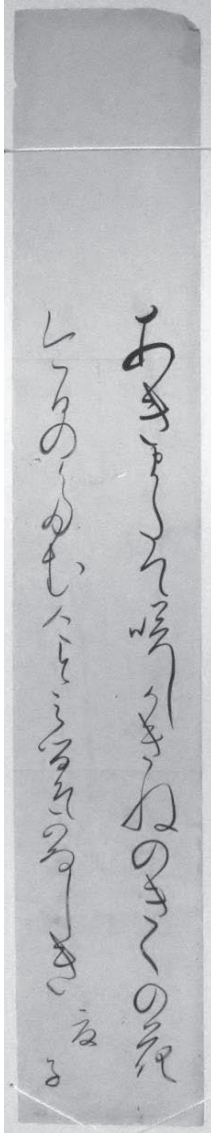
夏子



筑摩版全集四下「短冊・葉」49

142 裏

あきまたて咲しかきねのきくの花 / 今日のとむけとみるそかなしき 夏子

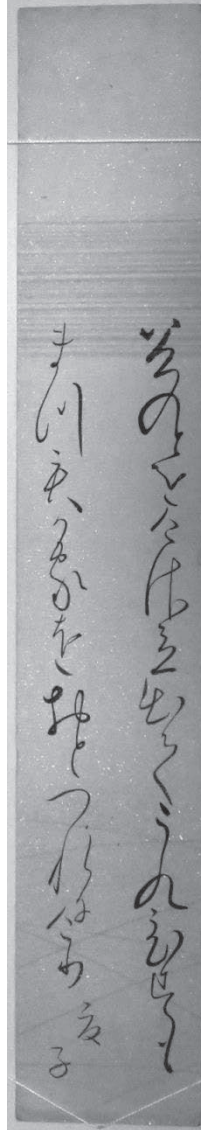


筑摩版全集四下「短冊・葉」49

C 六四点の「夏子」署名短冊中、保管状況にA・Bとの共通点があるもの 二点

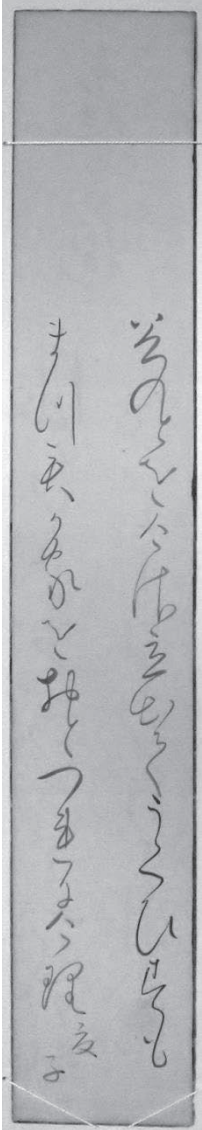
181

谷のをけさ立出てうくひすも／まつ君か家をおとつれにけり 夏子



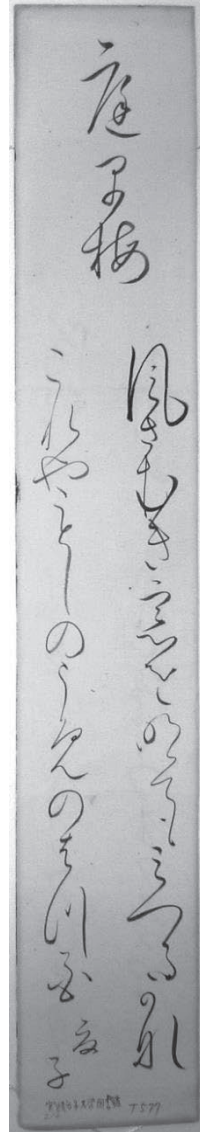
212 表

谷のをけさ立出てうくひすも／まつ君か家をおとつれにけり 夏子



212 裏 庭早梅 風さむき窓を明てもみつるかな／これやことしのうめのはつ花

夏子



【付記】

* 短冊はすべて実践女子大学所蔵。短冊番号は田辺家資料を読む会『伊東夏子関係田辺家資料』（平九・三、実践女子大学文芸資料研究所）によるものです。画像撮影には、台東区立一葉記念館のご協力を忝くしました。

* 「三 回想録の中の一葉——花園VS夏子」の本文は初出により、仮名表記も原文ママ、明らかな誤植や誤記は（ ）内に訂正を掲げました。

* 「四 一葉と花園」「五 一葉と夏子」のうち、日記の典拠は『樋口一葉全集』第三卷上（昭五一・一二、筑摩書房）、一葉書簡の典拠は『樋口一葉全集』第四卷下（平六・六、筑摩書房）。句読点、濁点、カギカッコを補い、傍注により原資料の誤字を訂正したものです。一葉宛て書簡は、樋口悦編『一葉に与へた手紙』（昭一八・一）に拠りました。いずれの引用も原則として漢字を常用漢字に改めてあります。

* 図版使用に関し、河鍋暁斎記念美術館、台東区立一葉記念館、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（順不同）に格別のご厚意をたまわりました。謹んで御礼申し上げます。